
北郷一刀～五度目の外史はＴＶ版恋姫！？～

ルシアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北郷一刀〜五度目の外史はTV版恋姫！？〜

【Nコード】

N8756V

【作者名】

ルシ阿斯

【あらすじ】

天の御遣い 北郷一刀 は計四回も外史を経験した。

北郷軍、蜀、魏、呉✓それぞれ順に経験をし武人としても軍師としても優秀になった 北郷一刀 は五回目の外史の扉を開く。

その外史はTV版恋姫！？

勇気を出して初投稿！！

第零話 北郷一刀、外史に降り立つの事（前書き）

文才がない素人ですが脱字誤字が無いように頑張ります。

第零話 北郷一刀、外史に降り立つの事

辺りに桃の木が生い茂り桃の花びらが風で舞う光景は正に桃園。
その桃園の一部の空間が軋み大きな口を開けた。その中から一人の
青年が出て来た。

「着いたか此処が……。」

彼の名は北郷一刀。歳は20ぐらいで顔立ちは整っている。一見優
男に見えるが纏う雰囲気は幾多の修羅場を経験したの如く研ぎ澄ま
せている。

その腰には黒塗りの刀が差してある。

彼は辺り一面を見渡した。

「桃か……これも偶然かな。」

その表情には一寸の曇りがあつた。過去の外史で愛する義姉妹達と
誓い会つた場所に同じ木があつたからである。

「さあて、自分の役目をこの外史でも果たすか。」

気を取り直した彼は数人の気配を感じた。

「この気配は”彼女の”。」

その中の一つに彼が何度も感じた事がある気配が在つた。過去の外
史で”敵”や”仲間”や”恋人”となり何度も感じた彼女の気配が。

「桃の木に彼女かよ、他の外史に影響している所があるんだな。」

内心納得しながら彼は気配が感じる場所に急いで走った。
この外史で五度目となる北郷一刀の物語が始まった。

第零話 北郷一刀、外史に降り立つの事（後書き）

感想、アドバイスをありましたらガンガン下さい。

第壱話 北郷一刀、関羽と出会った事（前書き）

短いですが何度もやり直し完成しました。文才が無い自分ですがどうぞ。

第壱話 北郷一刀、関羽と出会ふの事

一刀は気配を頼りにその場所に行くと五人の賊と長い黒髪の女性がいた。

女性は偃月刀を構え賊達と戦おうとしている。

一刀はすぐにその間に割って入った。

「誰だ！？ テメえ！！」

いきなり割って入ってきた一刀に賊達が驚く。

一刀はチビの男の質問に答えず腰の刀に手を添えて構えを取る。

「御人よ、助力に感謝しますが賊は私一人が・・・断ります。」
女性が一人で戦うと一刀に言い出すが一刀はそれを断る。

「貴方のような綺麗な方に戦わせる訳にはいきません。」

「ぶ、無礼な私は武人だ！ その・・・き、綺麗などと・・・」

「俺に任せてください（ニコッ）」

「わ、分かりました／＼」一刀の笑顔と口説き？で女性は顔を真っ赤に染めて了承する。

「おい！ 聞いてんのか！」

無視されていたチビの男が一刀達に怒鳴った。

「構わねえ！ 優男の身ぐるみも頂いこうじゃねえか！ やつちまええー」

リーダーらしきヒゲの男の掛け声で賊らが一斉に襲い掛かって来た。

一刀は襲ってくる賊達に集中し鞘の刀を一気に抜き賊達は宙を舞い倒された。

「お見事でした。」

「いいえ、そんなことは」

「ご謙遜を」

賊達を倒した一刀は女性と共に近くの村まで同行することになった道中。

一刀は女性に褒められていた。

「そういえば、まだ名を名乗っていませんでしたよね。俺の名は北郷一刀と言います。」

「姓が北、名が郷、字が一刀ですか？」

「いや姓が北郷で名が一刀、字はありません。」

「字がない？珍しいですね。」

「ええ、まあ」

「申し遅れました。私の名は関羽、字は羽長と申します。よろしく願います、北郷殿。」

「こちらこそよろしく願います。関羽殿。」

互いに名乗り合った一刀と関羽はこの大陸の事や自分達の事を会話しながら近くの村へと向かっていた。

（まさか最初に君に出会うなんて”あの時”以来だよな・・・今度は俺が君を護る番だよ・・・”愛紗”）

関羽と会話をしながら心の中で呼べない彼女の真名をそつと呼び彼女を護る決意をした一刀であった。

第壱話 北郷一刀、関羽と出会つの事（後書き）

感想、アドバイスなどドンドン下さい。

第貳話 一刀と関羽、張飛と兄妹（姉妹）の契りを結ぶのこと（前書き）

何とか完成しました。

では、どうぞ！

第弐話 一刀と関羽、張飛と兄妹（姉妹）の契りを結ぶのこと

共に村へ行く事になった一刀と関羽は歩き続け村が見える所まで来た。

通り掛かろうとした一本の木の隣に土が盛られていて二人は足を止めた。

見ると札が貼られて花が供えてある事からお墓だと分かった。そこに村から歩いてきた籠を背負った老婆が二人の前で止まった。

「最近はこの辺りまで賊が出るようになってのう。身ぐるみ剥がされて殺されたもんも何人もおつてな、花はその人らのせめてもの手向けじゃよ。」

「そうだったのですか」

「お役人様がすっかりしとつたら物騒な事は起こらんじゃたろうに、いやな世の中になったもんだねえ。」

二人はお墓に手を合わせ拝み老婆は再び歩きだし二人が来た方へ進んだ。

関羽はその老婆の背中を見ながら悲しい顔をしたのを一刀は見えていた。

そして二人は歩きだし村に入った。

「（こんな村の近くまで賊が出没しているとは。一体、この国はどうなっているのだ。）」

「関羽殿？」

「は、はい?!」

「大丈夫ですか?何か真剣な表情をしていましたが。」

「い、いいえ何も。それより「ひいい、出たあ」賊か!うわあ?!」

村を歩き続けていたら突如聞こえた悲鳴に身構えた二人だが鶏がいきなり目の前に現れて関羽は驚き声をあげた。

「退けどけどけえー!!鈴々山賊団のお通りなのだあー!!」

鶏の後に続くように「鈴」の文字の旗を掲げ、豚に乗ったショートカットの虎の髪飾りをした少女を先頭に子供達がこちらに走ってくる。

「こ、子供?!」

「(あれは、鈴々?!)」

「きゃっ」

「関羽殿!」

子供達の前で逃げていた鶏を咄嗟に避けたが尻餅をついてしまった関羽を急いで一刀は抱き寄せて道の脇に避け子供達は二人の前を通り過ぎ村から出て行った。

「な、何だつたんだ?」

「ほ、北郷殿!//」

「どうしかったですか、関羽殿？」

「そろそろ・・・離れて貰いたいのですが／＼／」

「はい？」

一刀は関羽に言われて気づいた。彼女を自分の方に抱き寄せていたままであったから。

「うわぁ?!」

一刀は急いで関羽から離れた。

「すみません！関羽殿」

「い、いえ／＼／・・・構いません／＼／」

「あ、あの・・・その・・・お昼を食べましょうか！」

「そ、そうですね！／＼／」

二人は飯屋まで向かうまで気まずく黙ったままであった。

「フツハハ！それは災難だったねえ。」

「笑い事では無い。」

飯屋に入った二人は炒飯を食べながら女将に先程の騒動の話を話した。

「何だのだあの悪ガキ共は鈴々山賊団とか名乗っていたが。」

「名前通り、”鈴々”って子が大将の悪ガキ集団さねえ。ま、やっていることは畑荒らしたり、牛にイタズラしたりって事だけだねえ。そっぴゃあ、この前なんか庄屋様の家の塀にバツカデツカイ庄屋様の似顔絵を落書きしとったけどアレは傑作だったねえ。」

「それにしても親や何をしてるんだ。山賊気取りの悪ガキをほって置くんなんて。」

「あの子、親は居ないんだよ。」

「えっ」

「（やっぱり）」

「何でも小さい頃に押し行つて来た賊に両親を。その後、この村の近くの山小屋に住んでいた母方のじいさんに引き取られたんだけどね。そのじいさんも亡くなって、今は・・・一人。」

「・・・」

「あの子だって、根はいい子なんだよ。今はただ羽目を外しているだけ、手下の子供達の親も大目に見つてやっているのよ。」

二人は鈴々の事情を知り黙ってしまった。
関羽は重苦しく言った。

「ところで・・・女将・・・実は折り入って頼みがあるのだが。」

「頼み？」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

一方、その頃。

鈴々山賊団は山小屋（鈴々の家）に居た。
中から笑い声が聞こえ楽しそうだった。

「今日も大成功！！」

「そっぴゃあ、この間の庄屋の家の塀に書いてたアレ。消されちゃ
つてたよなあ」

「傑作だったのに勿体ないよね。」

「ないよね」

「なあに、今度はもおつとスゴイやつを書いてやるからいいのだあ
ー！！」

「さすが、親びん！」

「鈴々山賊団、最高！」

「「「最高！」「」」

「「「アッハハハ」「」」

カーカー

子供達は楽しく笑いあった時、カラスの鳴き声が聞こえ外は夕方だった。

「そろそろ帰る？」

「うん！」

「あつ」

「アタシも」 「俺も」 「アタイもつと」

「親びん、さよなら」 「また明日」

「うむ、また明日山賊するのだあー！！」

鈴々は帰る手下の子供達に元気に手を振り続けた。見送り終わった鈴々は家の中に入っていったが
悲しい顔をしていた。

「明日になれば、また皆に会えるのだ。明日になれば・・・」

+++++

時間は過ぎ、夜。

一刀と関羽は昼間の女将の店で飯代の立て替えのため働いていた後、
寝屋に倉庫を借りた。

「ふう、あの女将。結構人使いが荒いなあ」

「ハハ、でも此処を使わせてくれるんですからありがたいですね」

「確かに私のいつもの野宿に比べたら天国です」

「さて、寝ますか」

「そうですね。おやすみなさい、北郷殿。」

「おやすみなさい。」

関羽は横になりながら昼間の鈴々の話を思い出し目を閉じた。

「賊に・・・両親を・・・か」

「愛紗、起きろ！愛紗！」

それはまだ関羽が幼かった頃の出来事。夜遅く自分の真名を呼ぶ声に関羽は起きた。

目を開けるとそこには兄の顔があった。

「兄者、どうしたのですか？」

「賊だ！村が襲われた」

「ええ！」

「今すぐ寝台の下に隠れるんだ。早くしろ！」

幼い関羽は兄の言うとおりに寝台の下に隠れた。

「眼をつぶって、ジツとしている！絶対に声を出すんじゃないぞ！」

そう言った兄は急いで家の外へ走った。

外からは騒がしい男達の声と兄の声が聞こえた。

関羽は兄の言うとおりに目をつぶって心の中で兄を呼び続けた。

（兄者・・・兄者・・・兄者）

兄の悲鳴が聞こえ目を開けると倒れた兄の姿が。

関羽は嫌な過去を思い出した。まだその時の賊達の声が頭の中に響きそれを消すように寝返りをし目を閉じた。その様子を起きていた一刀は気づいていた。

（・・・愛紗。）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

夜が明けた朝。

一刀と関羽は厨房で働いていた。

「ハア！」

関羽は大根を宙に投げ、見事な包丁捌きで切った。

「たいしたもんだねえ、けどあの子みたいに普通に切れないのかい。」

女将の指差す先には普通に手際よく野菜を切っていた一刀がいた。

「ちゃんとした料理は余りやったことがないので、つい。」

「まあ、いいさ。それが済んだら次に二人で薪割りに店の掃除。納屋の片付けも頼もうか。あと、山に行つて芝を刈つてきておくれ。急いでだよ。」

「えっ！い、いやあの・・・ちょっと本当に人使い荒くないか・・・」

「頑張りましょう、関羽殿」

「はい」

女将の人使いの荒さに軽く涙を流す関羽を励ます一刀達は順に仕事を終わらせ、芝刈りの帰り道。

「アレ、何でしょうか？」

「ん？」

一刀が指差す先には大きな家の前で人が集まっていた。

二人はそこに行くと思地の中で偉そうな男と兵士達が会話をしていた。

「いいですか、相手は子供と言っても手がつけられない暴れ者。油断は禁物ですぞ！」

関羽は近くの女性に聞いた。

「何かあったのですか？」

「何でも今からお役人に鈴々を捕まえて貰うんですって。」

「お役人につて、子供相手に大袈裟な。」

「庄屋様、この間の落書きが相当頭にきなさつたらしくて。今回はかりは堪忍袋の緒が切れたと」

「北郷殿、実は・・・つてあれ？居ない。」

「庄屋殿、話の途中ですがすみません。」

一刀は庄屋に所に居て話し掛けていた。

「何だ？お前は」

「俺は旅の武芸者で北郷と言います。鈴々は俺に任せてください。」

「お前が？！確かに物騒な物を持っているが本当に強いのか？」

「腕に自信はありますだから一人だけずるいですよ、北郷殿。」
つて関羽殿？！」

「庄屋殿、私の名は関羽、字は雲長と申します。私にもお任せ下さい。」

「まさか、お前は噂の”黒髪山賊狩り”か！」

「なに?! あんたが！」

関羽を見て突然、役人の一人が声をあげ、庄屋もそれを聞いて驚いた。

「まあ／＼自分で名乗った訳ではないですが・・・」

「」「」「ええ!」「」

「髪が綺麗な絶世の美女と聞いたのだが」

「噂は当てにならないなあ」

「え、ええと#それはどういう意味ですか#」

「どうする?」「しかし」

関羽の登場で話し合う役人達。結果、鈴々の事は二人に任される事になった所を男の子が見ていた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「これが一本杉かあ」

「左の道に行けば、あとは道なりだそうですよ」

関羽と一刀は鈴々の家へと行くため山道を歩いていた。

「関羽殿、危ない！」

（カァン！）

「何奴っ！」

二人が歩いていると突然石が飛んできて一刀は刀で打ち落とした。関羽が見ると木の上には男の子が居てたくさんの石を持っていた。

「ここからは鈴々山賊団の縄張りだ！役人の手先はとっとと帰れ！」

「コラ！やめないか、当たったらどうする！」

「ふっ！はぁ！」

男の子の石攻撃を二人は打ち落としていく。

「うるさい！絶対親びんを捕まえさせないぞ！」

「ああ、めんどくさい！こうなれば、ハァ！」

キーン！！

「うわぁー！」

「よっつと！」

石攻撃に我慢ならず男の子が居る木を切り倒し落ちてきた男の子を一刀がキャッチした。

「はぁゝ助かったゝ」

「それはどうかな#」

「ひいい、ギャアー！」

関羽にお仕置きをされた男の子の悲鳴が山に響き渡った。

先に進んで行く二人を追いかけてくる男の子だがこちらが振り向くと岩などに隠れた。どうやら関羽のお仕置きは効いたようだ。

二人は男の子を気にせず先へ進もうとしたら女の子達が二人の前に現れた。

「やあゝい、バゝカ」「ブスゝ」「年増ゝ」

「なあに！誰が年増だ・・・誰が#」

「関羽殿、その先は落とし穴ですよ。」

「はい？」

関羽の足元には明らかに落とし穴と分かるたくさんの葉っぱがあった。

「ありがとうございます、北郷殿。ふっふふ、子供にしては知恵を絞ったようだ、ハアア！」

関羽は足元の落とし穴を飛び越えた。

「このような罠に掛かる関雲長ではないわあ！」

子供達の前に見事な着地した関羽だが子供達にはやけていた。

「ん？キャア！！」

「関羽殿？！」

「うゝ、一生の不覚っ！」

さらに落とし穴があり関羽は落ちてしまった。

「やあゝい、引っ掛かってやんの」「デゝブ」「どうする？」「お
しっこ、かけちゃえゝ」

「コラーー！！」

「」「」「ひいい」「」「」

怒った関羽が子供達にお仕置きをし子供達の悲鳴がまた響き渡った。

「親びんはお前達なんかに捕まらないからな」

「わかった、わかった」

「鈴々の事は悪いようにはしないよ、皆は村に帰ったほうがいいよ」

「本当に？」「村に帰ったら親びんを役人に渡したりしない？」

「もちろん、約束する」

「ねえ、帰ろう。」「そうすつか！」「うん」

関羽と一刀の言葉を信じ子供達は帰ることにしたが帰り際に。

「ブース、デープ、年増！お前達なんか親びんにやられちゃえ」

「ハア」

「（いい友達がいるんだな、鈴々）」

+++++

「まったく、確かにお前達に比べたら年上かもしれんが・・・」

関羽は子供達に言われた事を気にしていた。

「関羽殿。貴女は若くて綺麗ですよ（ニコッ）」

「な、何を！／＼私はさっきの事は気にしてはいませんよ！」

「言ってたじゃないですか。」

「うつ、その北郷殿／＼ありがとうございます／＼」

「いいえ」

歩き続けた二人は広い場所に着いた。二人は周りに誰か居ないかと思ながら進んでいくと高い崖の上に自分の身長より大きい得物 蛇矛 を手にした鈴々が立っていて関羽が声を掛けた。

「お前が鈴々か！」

「真名で呼ぶなあ！真名を呼んでいいのは親しい者だけなのだ！だからお前に呼ばれる筋合いはないのだ！」

「なるほど、改めて名を聞こう！」

「鈴々の名は張飛、字は翼徳。寝た子も泣き出す鈴々山賊団の親びんなのだ！」

「君の手下の子は村に帰ったよ」

「えっ！」

一刀の言葉に驚いて崖を器用に飛び降りた。

「鈴々の友達に何をしたのだ！」

「なにちよつとしたお仕置きをな。」

「おのれ！＃仲間の敵！十倍返しなのだ！」

「い、いや敵って死んでないからね」

「どうやら口で言っては聞いて貰えないようですね、北郷殿。ニコッは私が。」

「いいえ、関羽殿。俺がやります。」

「しかしっ！」

「大丈夫です ニコッ」

「な、な／＼／（な、何だ／＼／北郷殿の笑顔を見ると胸が・・・）
・・・わかりました。」

「ありがとうございます、さあ！来いっ！」

「とおうりゃあ〜！」

ガキン！

一刀は 鴉 を抜き張飛の攻撃を真っ向から攻撃した。

「ハア！」

「ふっ、うりゃあ〜！」

張飛は攻撃を避け反撃、一刀は攻撃を受けとめ飛んだ。

（やっぱり強いな、鈴々。でも今の俺も強いんだよ）
「ハア！」

ガキン！

「にゃあ〜！」

ガキン！

一刀と張飛の攻防は夕方まで続いた。

「さすがだよ、張飛。」

「お前も中々やるのだ、でも鈴々の本気はここからのだ！うりゃあ〜！」

「張飛、俺もだよ。ハア！」

ガキーン！

二人の戦いを見ていた関羽は一人の武芸者としての顔になっていた。

（あの小さな体から力強い攻撃、ただ者ではないな張飛は。しかし北郷殿むすごいな、何者なのだ北郷殿は・・・）

今だまだ続く得物同士がぶつかり合う音は夜になってから止んだ。

+++++

張飛の家の風呂場。

関羽は張飛の家の湯舟に浸かっていた。

（妙な事になったな）

関羽が張飛の風呂にいる理由は一刀と張飛の勝負まで遡る。

一刀が放った一撃が張飛の蛇矛を飛ばした。得物が無くなり張飛はやられると目を閉じたが一刀は張飛を抱きしめ優しい声で言った。

『寂しかっただけなんだよな』

『う、うえーん！鈴々はずっと寂しくてどうしていいかわからなくて、それで・・・それで』

張飛は今まで溜めていたものを一気に涙として一刀の胸の中で泣いた。

一刀は張飛が泣き止むまで抱きしめていた。

泣き止んだ張飛は一刀と関羽の前でふて腐れて座っていた。

『好きにしろ、それはどういうことだ？』

『勝負の途中で泣いちゃったからさっきのは鈴々の負けなのだ。だから勝った方は負けた方を好きにしていいいのだ。』

『別に私達はお前をどうこうする訳ではない。』

『張飛が庄屋さんや村の人達に謝ってもらえばそれだけでいいんだよ』

『う、うん』

『謝る時は私達も付き添ってやるから明朝に村の入口で待ち合わせとしよう。では、帰るな』

『よ、夜の山道は危ないのだ。だから今日は家に泊まていくのだ。』

『生憎、私は旅が長いだから』泊まっていくな、張飛。』って北郷殿？！』

『いいじゃないですか、もう遅いですし泊まって行きましょう。』

『はあ、わかりました。一晚厄介になっていいか？』

『じゃはよ。』

+++++

こうして二人は張飛の家に泊まることになった。

「ふう（優しいお人だ、北郷殿は）」

「湯加減はどうなのだ？」

「調度よい加減だ。」

「なら、鈴々も入るのだ！突撃！」

バァッシャーン

「コラ！飛び込むな！」

「にゃっ！」

「まったく、風呂の入り方も・・・ん？」

「ジ」

「何だ？どうした？」

「おっぱい、大きいのだ」

「な／＼」

「どうしたらそんなにバインバインになるのだ？」

「どうしたらって・・・そうだ、志だ！胸に大志を抱けばその分だけ大きくなるはず・・・」

「本当に？」

「まあ、そういう説も有ったり無かったり・・・」

「ようし、だったら鈴々も大志を胸に抱くのだ！」

「そうだな、そうすればいい。大志を抱くことは悪いことじゃない。そろそろ出よう、北郷殿が待っている。」

「わかったのだ」

二人が風呂を出た後に一刀が次に入った。

風呂から出た一刀は着替え部屋に行くと寝間着に着替えた関羽と張飛が寢床を用意し待っていた。

「張飛、北郷殿と一緒に寢床を使えばいい」

「いや、関羽殿が張飛と使えばいいですよ」

「そうはいきません。北郷殿は勝負をしてお疲れなのですから」

「いいえ、このくらい大丈夫ですから」

用意した寢床は二人ぐらいが寝れる大きさだったため一刀と関羽は互いに譲り合いになった。

「こうすればいいのだ」

「「えっ！」」

張飛は二人の腕を引つ張り自分の両隣に寝かせ川の字になった。

「これなら三人一緒に寝れるのだ」

「ま、まあ・・・これなら（これでは北郷殿と家族のようではないか／＼／＼）」

「でも、いいのかい？張飛は狭いけど」

「別にいいのだ」それにこんな風に誰かと一緒に寝るのは久しぶりで・・・その全然嫌じゃなくて・・・その父さまと母さまと一緒にいたいで・・・」「バ、バカいえ！私はお主のような娘がいる歳ではない！せいぜい、姉と言ったところか・・・」

「姉・・・」

「そ、それ以前に私は子供ができるようなことは一度も／＼／（チラッ）」

「ん？」

関羽は一刀をちよつと横目で見た。

「姉だったら、お姉ちゃんだったらいいのか？」

「ま、まあそれだったらいいが・・・」

「だったら今日から関羽は鈴々のお姉ちゃんなのだ」

「えっ！ま、待って・・・姉ならいいと言ったがそういう意味じゃない

くて・・・」

「ダメなのか？（ウル）」

「ダ、ダメではないが」

「やったー！鈴々にお姉ちゃんが出来たのだ！」

張飛は嬉しくなつて関羽に抱き着いた。

「よかつたな、張飛」

「そ、そのお兄ちゃんにも鈴々のお兄ちゃんになつてほしいのだ／＼」

「俺が？」

「ダメなのか？」

「別にいいよ」

「やったー」お兄ちゃんも出来たのだ」これで夜も・・・寂しくないのだ」

張飛は一刀にも抱き着いた。二人はその姿を見て決心した。

「わかった、お主の姉になつてやろう」

「俺も兄に」

「うん、ずっと一緒なのだ」

「ならば私と共に世の中を変えるための旅に出てくれぬか？」

「世の中を変えるため？」

「まあ、実際にはどうすれば世の中が変わるのかを探すと言ったところなんだがな。どうする？一緒に来るか？」

「当然なのだ！でも、お兄ちゃんは？」

関羽と共に行くことを決めた張飛は一刀がどうするのかと一刀の方を見た。

「もちろん、俺も行くよ」

「ありがとうございます、北郷殿」

「やったー」

一刀も関羽と張飛と共に行くことを決め三人は仲良く川の字で寝た。

+++++

朝。

三人は村へ庄屋、村人達にこれまでの張飛の行いを謝りに行き許してくれた。そして、張飛が世直しの旅に出ることを知った村人達に見送れ三人は村を出た。

「よかったな、張飛。庄屋殿も村人も心よく見送ってくれて、これもお前がちゃんと謝ったからだぞ」

「う、うん」

三人は歩き続け一本杉の所まで来た。

「一本杉を右に行くぞ。それとも一度、小屋に戻るか？」

「う、ううん。いいのだ」

一本杉の右側の道を歩く三人。ここまで元気が無い張飛に關羽は声を掛けた。

「どうした？もう村が恋しくなったのか？」

「そうじゃないのだ。ただ、山賊団の皆が見送りに来てくれなかったから」

「・・・」

「きつと鈴々がいい親びんじゃなかったから・・・だから皆それで・・・」

「そんなことはないみたいだよ、張飛。」

「えっ」

「ほら、アレ」

一刀が指差す先には小屋があり、屋根の上には山賊団の子供達が居た。

「親び〜ん!!」

「武者修業して強くなつてね〜」 「皆、親びんが帰つて来るのを待っているから〜」 「親び〜ん!」

「み、皆」

思わない山賊団の皆の登場に涙を流す張飛。

「泣くな、旅立ちに涙は不吉だぞ」

「そうだよ」

「泣いてなんかいないのだ」

「人は次に会う時まで別れ際の顔を覚えているものだ。立派な親びんならばそんな情けない顔を覚えて貰いたくはないだろう」

「元気に手を振ろうな」

「うん、皆〜!行つて来るのだ〜!」

一刀、関羽、張飛の旅が始まった

紀元二世紀も末の頃、この世は乱れに乱れておりました。そんな中、

力を蓄え密かに野心を研ぎ澄ます者

己の力を試さんと文武に励む者

護るべき者のために闘うとする者

様々な想いを胸に抱く者達があやなす運命の糸が絡み結ばれる

「そろそろマントは要らぬな」

「もう、春なのだ」

「そうだな」

世紀末に舞う無双の姫達と天の御遣いの行く末をとくところを
覽あれ

第弐話 一刀と関羽、張飛と兄妹（姉妹）の契りを結ぶのこと（後書き）

どうだったでしょうか？

感想、アドバイス等をお待ちしております。

第参話 一刀と関羽、趙雲と死地に赴くこと（前書き）

気づいたらアクセス数7000突破！ありがとうございます。
今回はあの二人が登場！さらに一刀の技も出ます。では、どうぞ！

第參話 一刀と関羽、趙雲と死地に赴くこと

新たに張飛を仲間に加え旅をする一刀と関羽。

次の村へと向かうため歩いていたが張飛が不機嫌だった。

「む」

「どうした、さっきから難しい顔をして」

「お腹でも痛いのか？」

「二人共、おかしいのだ」

「おかしい？何がだ、張飛」

「そうだよ、張飛」

「そこなのだ！」

「「はあ、そこ？」」

「関羽もお兄ちゃんも鈴々のお姉ちゃん、お兄ちゃんなのにどうして鈴々のこと鈴々って真名で呼んでくれないのだ。親しい同士は真名で呼び合うのが普通なのにおかしいのだ！」

「確かにそうだが、知り会ってまだ間もないし」

「まあ、俺も」

「鈴々は関羽のことちゃんと真名で呼びたいのに教えてくれないし・
・お兄ちゃんも呼んでくれないし・」

「わかった、わかった」

「ごめんな」

「んっ！私の名は関羽、字は雲長、真名を愛紗という。お主には真名で呼んでもらいたい。これでいいな、”鈴々”」

「俺は姓が北郷、名は一刀。字と真名はないから好きに呼んでくれ、”鈴々”」

「わぁっうん！」

一刀と関羽に真名を呼ばれた鈴々は上機嫌になった。三人は歩き続け街の入口に到着した。入口を入った所で門番に声を掛けられた。

「ちょっと待って」

「何か？」

「違ってたらすみぬがお主、最近噂の黒髪の山賊狩りではないか？」

「い、いや／＼ま、まあそう呼ぶ者もおりますが・・自分で名乗っている訳では／＼・」

「よかったあ、近くの村に現れたと聞きそれらしき武人を見掛けたら声を掛けていたのですが黒髪の綺麗な絶世の美女との事だったので危うく見過ごす所でした。」

ピシィ

「そ、そうですね」

「さっそく、我らが主に知らせなければ・・・」

「えっ」

「しばらくここでお待ちを」

門番は街に入って行ってしまった。

「愛紗は綺麗で有名なのだ」

「黒髪がな#」

「そんな事はないですよ、関羽殿。な、鈴々♪」

「うん、お兄ちゃんの言うとおりなのだ！」

「鈴々も言ってますしね」

「・・・／＼。ありがとうございます／＼」

その後、門番が戻って来て三人はこの辺りを治めている太守の元へ案内された。三人は屋敷の庭の東屋（休憩所）で待たされていた。すると二人の女性が近づいてきた。青い髪で白を基調にした服の女性と影が薄そうな女性。

一刀と関羽は椅子から立ち上がった。

「そのまま、結構」

「（白蓮に・・星か）」

一刀が知っている二人の女性は席に着いた。

「待たせて済まない、我が名は公孫賛、字は伯珪。太守としてこの辺りを治めている。こちらはお主と同じ旅の武者で」

「我が名は趙雲、字は子龍。お初にお目にかかる」

「趙雲殿には客将として、私の下に留まって貰っている」

「お招き与り光栄です、私の名は関羽、字は雲長。こちらは・・・」

「俺の名は北郷一刀、関羽殿と共に旅をしている武者です。」

「それで、こちらは」

「鈴々なのだ！」

「コラ！真名でなく、ちゃんと名乗ってあいさつせぬか」

「そつだよ、鈴々」

「関羽殿、北郷殿。歳の割に随分、大きなお子さまをお持ちで・・・」

「ち、違います！／＼／鈴々は私と北郷殿の娘じゃなくて！／＼／」

「妹なんですよ、趙雲殿」

「そう！／＼姉妹の契りを交わした中でして／＼」

「ほう、姉妹の契りをでは、どちらが攻めで、どちらが受けですかな？」

「な？！／＼」

「（やつぱり、星だな）」

「うーん？どっちゃかって言うと鈴々が攻めなのだ」

「コラ！よく意味も分からんくせに適当な返事をするな！」

「じゃあ、どういう意味なのだ？」

「そ、それはだな・・北郷殿、お願いします」

「お、俺ですか？！ええっと・・」

「ま、まあ、そういう話はまた後でもらうとして実は関羽殿に折り入って頼みが有るのだが」

「私に？」

公孫賛が真剣な話をし始めた。

「辺境の小領主ではあるがこの公孫賛、今の世を憂いる気持ちは人

一倍あるつもりだ。兗州の袁紹、江東の孫策に都で最近頭角を現して来た曹操と天下に志を抱く者は皆、ういの人材を求めているとか、昔日の漢王室の権威、既に無く乱れに乱れた世を正すためお主の力をぜひ、私に」

「公孫賛殿、お話しの途中、申し訳ないがそれは少し早計ではありませぬかな？」

趙雲が言った。

「と、言つと？」

「黒髪の山賊狩りの事は私も旅の最中に風の噂で耳にしました。だが噂というのは得てして尾ヒレが付きがちなもの・・・」

「まあ・・・確かに」

関羽は心当たりがあつて否定できなかった。

「故に関羽殿の実力を見極めてからお召しかかえになつても遅くないのでは？」

「うむ、なるほど」

「それにもうお一人お召しかかえるべき者がおります」

「ん？それは誰だ？」

「北郷殿です」

「北郷殿が？しかし」

趙雲の言葉に少し信じられない公孫贊。

「差し支えなければ、お二人の実力を計る役目を私がお引き受けします」

「おお！いかがかな？趙雲殿の一手、手合わせしてもらえぬか？」

「いや、しかし私は」

「俺も・・・まあ」

「臆されましたかな？」

「ん#」

「（言うじゃないか#）」

趙雲の言葉に気が障る二人。鈴々が突然立ち上がった。

「そんなわけないのだ！」

「コラ、鈴々」

「愛紗とお兄ちゃんはずーごく強いのだ！だからお前なんか絶対に絶対、負けたりしないのだ！っていうか、お前なんか愛紗達が出る幕までもないのだ！鈴々がちょちょいのぷくでコテンパンにしてやるのだ！」

「ほゝ、随分な自信だな」

趙雲も立ち上がった。

「それでは、一つ・その自信の程、試させてもらおうか？」

「望むところなのだ！」

鈴々と趙雲が手合わせすることになり五人は東屋を少し離れた広い所に移動した。鈴々と趙雲は己の得物 蛇矛 龍牙 を手に対峙する。

「始め！！」

中央に居る公孫賛の合図で始まった。

「どおつりゃあゝ！」

鈴々は飛び上がり趙雲に向かって得物を振り下ろした。

ガッキン

「ほゝ」

趙雲はそれを受け止めた。鈴々は宙返りをして後退し得物を頭上で振り回し再び攻撃する。

「うりゃりゃりゃゝ！」

ブン

「ふっ」

スッ

「りゃあ！」

ブン

「ふっ」

スッ

鈴々の攻撃をギリギリに避ける趙雲に公孫賛の隣に居る関羽の顔が真剣になった。

「りゃあ！りゃあ！りゃあ！」

ブン　ブン　ブン

「ふっ！ふっ！ふっ！」

スッ　スッ　スッ

鈴々の攻撃は続くが趙雲はそれを避けるばかりだった。

「ヒラヒラ逃げてばかりなのだ！」

「ふっ、どうした？もう終わりか？」

「まだまだなのだ〜！」

「鈴々！そこまでだ！」

趙雲の挑発に乗り攻撃しようとした鈴々を関羽が止めた。

「どうして止めるのだ？鈴々はまだやれるのだ！」

「わかっている、ただ・・・私が立ち会ってみたくなつたのだ」

「ん？」

鈴々に代わり関羽が趙雲と手合わせとなり関羽は自分の得物 青龍偃月刀 を手に構え関羽から闘気が溢れ出す。

「いざっ！」

趙雲が構えを解いた。

「ん？」

「本当に強い相手ならわざわざ撃ち合わなくても分かる。公孫賛殿、関羽殿のお力しかと見届けました・・・続いて北郷殿ですが・・・」

「うむ、北郷殿。では「いえ、北郷殿のお力も見届けましたので」・そうか、お主が言うのであれば」

「（闘わなくてもわかる・・・北郷殿はこの中で一番強い・・・何者なのだ？）」

手合わせは終わり五人は東屋に戻りお茶を飲んでいたが鈴々は不機嫌だった。

「む」

「どうした、鈴々。そんな膨れっ面して」

「さっきのだと何だか鈴々が本当は強くないみたいなのだ」

「い、いや・それは」

関羽はと言えばいいか悩んでいると趙雲が言った。

「張飛、確にお主は強い、ただその強さを上手く使えていないがな。ところで、公孫賛殿。この間、お話した例の件ですが・・・」

「ああ、シャクドウ山の事が」

「シャクドウ山の事とは？」

関羽が気になり公孫賛に聞いた。

「いや、恥ずかしながら山賊退治にちよつと手こずっていてな、奴らの出沒している範囲を考えて賊の隠れ家がシャクドウ山の山中にあるのは確かなのだがそれらしき砦が見つけられず討伐隊を出す事が出来ないのだ」

「それを聞いて先日、私が一件を案じたのだ」

「その策は？」

一刀が趙雲に聞いた。

「偽の隊商を仕立ててその荷物の中に潜み、これをわざと賊に奪わせて隠れ家に忍び込む。つまり、賊自らに隠れ家に案内させる寸法だ」

「なるほど、それは面白い」

関羽が興味を持った。

「しかし、賊の隠れ家に単身乗り込むなど・・・」

「虎穴に入らずんば虎児を得ず、狡猾な賊を討伐するには多少の危険はやむを得ぬこと、どうだ？関羽殿、北郷殿。私と共に賊の隠れ家を訪ねてみぬか？」

「引き受けた」

「俺も引き受けましょう」

「鈴々も行くのだ！」

「お主には無理だ」

「何でなのだ？#」

「よいか？荷物の中に潜み賊の隠れ家に向かう間はずっと息を殺してなければならぬのだぞ、お主のような根が騒がしく出来ている人

間には無理だ。きつと一時だっておとなしくしてはいられない」

「そんなことはないのだ！鈴々はやれば出来る子なのだ！」

「ほう？では、今ここでやってもらおうかな」

「お安いご用意なのだ！」

鈴々はイスに座りジツとした。

「こうやって、ジツとしていればいいのだから簡単なのだ！」

1分経過、5分経過、10分経過した辺りから鈴々は全身真っ赤にして

「はにゃー！」

全身から湯気を出し倒れた。

「鈴々？！大丈夫か！しっかりしろ！」

関羽が空かさず鈴々に駆け寄る。

「目を覚ませ！凄い熱だ！公孫賛殿！医者！早く医者を！」

「落ち着いてください、関羽殿！」

慌てる関羽を落ち着かせる一刀。

「しかし！」

「寝かせて頭に濡れた手ぬぐいを置いて冷ませば大丈夫ですから」

「は、はい」

「公孫賛殿、案内をお願いしても宜しいですか？」

「私が案内しましょう」

一刀は鈴々を抱いて公孫賛に案内を頼もうとしたら趙雲が自ら志願した。

「わかった、よろしく頼む趙雲殿」

「こちらです、北郷殿」

趙雲の案内で一刀は鈴々を寢床まで運び濡れた手ぬぐいで頭を冷やし寝かせた。

「関羽殿があそこまで慌てるとはあれでは本当の母親の様でしたよ」

趙雲は少しニヤつき一刀に話し掛ける。

「心配性なだけです」

「それでも見物でしたな」

「（やっぱり、星だな）」

+++++

屋敷の外。

一刀、関羽、趙雲は外に居た。

「ここに隠れるのか？」

賊の隠れ家に忍び込むための荷物の箱を開けて確認する関羽。空いてる箱は二つあった。

「うむ、少々窮屈であるがやむを得ないが箱は二つある一人は窮屈なく入れる。関羽殿と北郷殿、ここは夫婦仲良く一緒に入っては？」

「な?! / / 馬鹿を言うな! / / 北郷殿と私は / / /」

「（はあ、星らしいな）」

「ふつ、冗談だ。私と関羽殿が入り、北郷殿はもう一つに入ってください」

「わかりました、関羽殿」

「（北郷殿と夫婦 / / /）は、はい?!」

「大丈夫ですか？関羽殿」

「だ、大丈夫です！早く中に入りましょう」

関羽と趙雲が一つ目の箱に入り一刀が二つ目の箱に入り出発した。シャクドウ山の山中を関羽達を乗せた偽の隊商が進んでいく。箱の中の関羽と趙雲はというと。

「ちよ、趙雲殿！」

「シッ、いつ賊が来るのか知れんのだ声を出されたら困る」

「そ、それはわかつているのだが趙雲殿の膝が／＼／」

「私の膝がなにか？」

「あ／／／・ああ／／／」

「・・・／／／」

そばで聞いていた偽の隊商の男は恥ずかしながら運んでいく。

「はぁ、大丈夫かな？あの二人・来たか」

もう一つの箱の中で二人を心配する一刀、すると小さな気を感じた。それは偽の隊商を木陰から見ると二人の賊だった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

その頃の公孫賛は執務室で仕事をしていた。するとそこに文官の男が入って来た。

「公孫賛様」

「どうした？」

「先程、圀の隊商が賊に襲われたの報告が」

「で、首尾は？」

「はい、隊商を装っていた者に怪我は無く荷物の方はまんまと賊供の手に」

策が成功し公孫贇の顔は笑みを浮かべた。

＋＋＋＋＋

賊の隠れ家。

賊達は先程、奪った荷物を倉庫に運び込んでいた。

「きゃっ」

デブの男が運んで来た箱を置いた時に声が聞こえリーダーらしきヒゲの男が周囲を見た。

「どうしました？」

チビの男が問い掛ける。

「今、女の声がしなかったか？」

「はあ？なに言ってるんですか、アニキ。幻聴がするなんてよっぽど飢えているんっすね」

「そうかも知れねえな、よしまた村の娘に酌でもさせるか！」
賊達は倉庫を出ていった。すると箱の蓋が開いて中から一刀が出てきた。

「ふう、潜入成功。（賊の奴、村の娘って）」

一刀に続いて趙雲と関殿が箱から出て来た。

「大丈夫なようですな」

「あう・・・はあ・・・はあ」

「（何をやってたんだ？）」

何故か関羽は息が乱れ服も乱れていた。

「どうやら地下のようだな」

「地下？」

三人は倉庫を出て辺りを警戒しながら進んでいく。

「恐らくここは昔、鉾山だったのだろう」

「その坑道を隠れ家にしたという訳か」

「いくら探しても見つからないはずだ」

「思った以上に広いようだがこれでは出口を探すのは一苦労だな」

「しかし、適中にあつて得物がこれとは些か心もとないな」

関羽が懷から短剣を取り出した。関羽と趙雲の得物が長すぎるため持つて来れなかったのだ。

一刀は刀だから持つて来れた。

「やむを得ない、お主の乳が邪魔でこれ以上大きな武器が入らなか

ったのだ」

「！／／／べ、別に私の胸だけが場所を取っていた訳ではあるまい！」

「うむ、確かに。乳よりもお主の尻が場所塞ぎだったのかもしれない？」

「な！／／／」

「（星らしいよな、ん？）シッ、二人共静かに！」

関羽と趙雲のやり取りを後ろで見ていた一刀が気配を感じた。

奥から声が聞こえてきて三人はその場所へ行くと賊達が酒盛りをしていた。

「やめてください！」

「いいじゃねえか」

リーダーらしきヒゲの男が村の娘に手を出していた。

「（やっぱり、人質がいたか）」

「己、無体な、成敗してくれる#」

「関羽、どうするつもりだ」

「どうするも何も助けに行くに決まっておろっ」

「とはいえ、相手はあの人数だ、我の使命はこの隠れ家の場所を・・

おい！」

「関羽殿！」

関羽は一刀と趙雲の制止を振り切り駆け出した。

「下郎！そこまでだ！」

「は？グハア！」

関羽はリーダーのヒゲの男の首向け蹴り男は倒れた。

「大丈夫か？」

「は、はい」

関羽は村の娘に声を掛けた。

「な、何だ！テメエは！」

チビの男が関羽に言う。

「我が名は関羽、字は雲長！地下に巣くう姑息な賊共め！纏めて青龍偃月刀のサビにして・・・アレ？」

「何のサビにしてくれるって？」

「あのバカ・・・」

「（はあ、忘れてた愛紗の性格を・・・）」

岩陰で見っていた一刀と趙雲はすぐに行動をした。

「えへへ」「クククッ」

村の娘を後ろに關羽は目の前にいる賊達に短剣を向ける。

「貴様らごときっ！これで十分だ！命が惜しくなければ掛かってこいっ！」

「その台詞、そのままお前に返してやる、ヒヤハハハ！」

（ヒュン）（ヒュン）

（ガタン）（ガタン）

一刀と趙雲が投げた石が松明を倒し辺りは真っ暗になった。

「なんだ！」「どうした！」

賊達は混乱した。

「關羽殿、こっちだ！」

「北郷殿、趙雲」

賊達の混乱に紛れ一刀と趙雲は關羽の所まで来て關羽と村娘を連れて逃げた。

「どうやら、追って来ていないようだな」

「はあゝ」

「大丈夫かい？」

趙雲の言葉に安心し座り込んだ村娘を氣遣う一刀。

「まったく、猪武者は妹分だけかと思ったがお主も相当な者だな」

「すまん」

「あの、危ない所をありがとうございました」

「いや、礼は無用。当然の事をしたまでゆえ」

村娘が礼を言い事情を説明した。

「私はこの山の麓に住む者ですが、村の子供達と山菜摘みに山に入った時、偶然、ここへの出入り口を見つけてしまい・・・」

「なるほど、それで捕まったという訳か」

「実はここの地下牢に村の子供達が捕まっているのです。もし、私が逃げ出した事が知れたらあいつらに何をされるか・・・」

「どうするつもりだ？」

「無論、助けに行く」

「俺もです」

「だろうな」

子供達の救出に地下牢へ向かった。

+++++

一方、その頃の公孫贄は武装をし文官の報告を聞いていた。

「なに？張飛が！」

「はい、関羽殿と北郷殿のお戻りが遅いので自分も賊の隠れ家へ行く」と

「しかし、行くとってもそもそも隠れ家の場所がわからぬからその今回の策であろう」

「はあ、それは私も申したのですが、行けば何とかなるだろうからとにかくシャクドウ山の場所を教えろと」

「で、教えたのか？」

「はい、すると風の様に飛び出して行かれて・・・」

+++++

シャクドウ山の山中。

鈴々は歩いていた。

「迷子になったのだ〜！」

山中に鈴々の声が響き渡る。

「困ったのだ。これだと愛紗とお兄ちゃんを迎えに行けないのだ・
・そうだ！山で迷った時は木の切株を見ればいいってじっちゃんか
言ってたのだ」

鈴々はすぐに木の切株を見つけた。

「うーん？年輪の間が広い方が南だから・・こっちなのだ！」
鈴々は自分の感を信じ先に進んだ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

賊の隠れ家の地下牢。

子供達が捕まっており賊が一人居た。

「なんで、俺だけ・・とんだ貧乏くじだぜ・・ん？」

「突拳っ！」

ドウコオン

「グハア！」

見張りの賊に一刀は一気に近付きその腹に氣を纏わせ速さも乗せた
パンチをし賊は壁に激突し倒れた。

「カギ、ゲット！」

倒れた賊からカギを取り地下牢の扉を開け子供達と逃げ出した。

「出口が何処かわからないのかい？」

「すみません」

先頭を走る一刀が村娘に問い掛けるが目の前に賊が横の通路から出てきた。

「あ、いたぞ！こつちだ！」

見つかつてしまい別の通路へと逃げる。

逃げた先にはさらに通路がたくさんありその一つの通路へ逃げる。

「出口だ」

先頭を走っていた関羽に光が見えその先に行くと行き止まりだった。

下には深い谷底が見え向こう側との距離はかなりあった。

「くっ」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

一方、鈴々は南に向かって歩いていった。

「はあ、よく考えたら南に向かったからって何がどうなるものでもなかったのだ」

鈴々は落ち込み、ふっと横を見るとその先に関羽達の姿が見えた。

「ん？」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

関羽と一刀は谷底を見てどうするか悩んでいたその時、

「愛紗〜！お兄ちゃん〜！」

向こう側から鈴々が居たのだ。

「やっと見つけたのだ！」

「「鈴々！」」

「そんな所で何をしているのだ？愛紗〜！お兄ちゃん〜！」

一刀は鈴々の隣にある木を見て思い付いた。

「鈴々！その木をこっちに向かって切り倒せ！」

「なんでなのだ？」

「早く！」

「わかったのだ！うりゃあ〜！」

鈴々は蛇矛を振り回し木を切り倒した。

ギーー ガアン

木の先が向こう側に届き 橋の様になった。

「なるほど！そういうことでしたか、北郷殿」

「ほ」

「早くこれを渡って逃げるんだ！」

「さあ、皆」

「うん！」

子供達は一刀の言葉で橋となった木を渡る。
趙雲は後ろから追っつの気配に気付いた。

「まずいな、急げ！」

「早く渡るんだ」

「大丈夫だ」

「はい」

「皆も焦らず落ち着いて」

最後に村娘が渡り始めた。
。

「くっ、ガハア！」

追ってをひとまず倒した趙雲、その頃には子供達は渡り終わっていた。
た。

「よかつた」 「怖かつたよ」

一刀と関羽が安心した顔で見ていたその時、二人の足場に亀裂が入り崩れ木が落ちた。

「きゃあ〜！」

「関羽殿！」

「愛紗〜！お兄ちゃん〜！」

その光景を向こう側から見ていた鈴々が叫んだ。

「くっ！」

「ほ、北郷殿！」

関羽が谷底に落ちそうになったが一刀が寸前に関羽の手を掴み引き上げた。

「危ない所でした」

「ありがとうございます、北郷殿」

「無事か、二人共！」

そこに趙雲が駆け寄る。

「大丈夫だが、橋が」

「万事休すか」

「クククッ」

するとそこへ追つての賊達が来た。

「こうなったら覚悟を決めるしかないようだな」

「そのようですね」

趙雲は賊から奪った槍を一刀は鴉を抜き構えた。

関羽は先程、趙雲が倒した賊が落とした剣を手にした。

「なまくらだが無いよりはマシだな、行くか、北郷殿、趙雲」

「星だ」

「えっ」

「共に死地へ赴く中だ、これから私の事は真名で呼んでもらう・・
もちろん、北郷殿にも敬語はなしですぞ」

「わかった、星。私の事は愛紗と呼んでくれ」

「俺の事は一刀と呼んでくれ、星」

「では、行くぞ！一刀殿、愛紗」

「ああ！」

「おう！」

三人は賊達へ向かって行く。

「ハア！」

ザシュツ

「グハア！」

「セイツ！」

ザシュツ

「ガハア！」

次々と賊を倒して行く三人。

「ええい、取り囲んで押し込め！」

リーダーのヒゲの男の命令で賊達は三人を取り囲んだ。

「不思議だ。お主達に背を預けていると負けぬ気がせぬぞ、愛紗、一刀殿」

「私もだ！背中では任せたぞ！星、北郷殿」
「任せる！関羽殿、星」

「ハア！」

三人は賊達に向かって行った。

+++++

その夜。

公孫賛の屋敷。

公孫賛は武装し中庭で自分の白馬を用意して剣を振りやる気十分だった。

「公孫賛様」

そこへ文官がやってきた。

「どうした？」

「関羽殿、北郷殿、趙雲殿がお戻りになりました」

「ほう、して首尾は？」

「はい、見事賊の隠れ家突き止められたのですが・・・」

「ですが？」

「はあ、そのまま三人だけで全ての賊を成敗したと・・・」

「さ、三人だけで・・・全て・・・じゃあ、私の出番は！」

「残念ながら・・・」

「白馬に跨がり華々しく、白馬將軍公孫賛！只今、推参！つみたいな事は？」

文官は首を横に振った。

「は、はは、そうなんだ」

出番が無く終わった公孫賛でした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

夜が明けて公孫賛の屋敷を後にし次の村へと向かう関羽、一刀、鈴々の隣には星の姿があった。

「しかし、よかったのか？我々はまだ志願するつもりはなかったが、星はあのまま公孫賛殿に仕えれば一角の将として兵を任せられただろうに」

関羽が気になり星に質問する。

「公孫賛殿は決して悪い人物ではない。だが、ただそれだけだ・・この乱世を治めるような器ではないし、影も薄い」

「何気に結構、キツイこと言ってるな」

「この広い蒼天の下、真に仕えるに値する主はきつと他にいるはず・それに何よりお主達といった方々がこの先、楽しそうだ」

「そうか、よろしくな！星」

「こちらこそ、よろしく頼みますぞ一刀殿。色々と」

「あ、ああ」

「ふふっ」

「にやははっ」

こうして一刀達の旅に新たな仲間 星 が加わり四人となった一刀達は次の村へと向かうのであった。

第参話 一刀と関羽、趙雲と死地に赴くこと（後書き）

どうでしたか？

感想、アドバイスをいつでもお待ちしております。

第四話 張飛、馬超と相打つこと（前書き）

一刀の出番が余り無い話になっております。

悩み続けて完成させました。

では、どうぞ！

第四話 張飛、馬超と相打つこと

キ州の太守の屋敷。

長い金髪を縦ロールに巻いた女性は湯浴みを済ませ部屋で一息ついている彼女こそ、キ州の太守 袁紹 である。そこに活発そうな短い髪型をした女性 文醜 とおかつば頭の女性 顔良 が入ってきた。

「猪々子、斗詩。二人揃ってどうしましたの？」

「麗羽様、曹操がお目通りしたいと出向いて来ておりますが」

「お風呂に入って、ようやく目が覚めたところなのに朝からあんないけ好かない小娘と顔を合わせなきゃいけないなんて」

「って、もうお昼ですよ。麗羽様」

「睡眠不足はお肌の大敵なのよ」

「と、とにかく我が領内に逃げ込んだ賊を征伐するためわざわざ都から参られたのですからご挨拶しないわけには・・・」

「分かってますわよ！服を着たらすぐに行きますからもう少し待たせておきなさい」

袁紹は着替え、曹操が待つ玉座の間へ行った。

+++++

玉座の間。

袁紹は文醜と顔良を隣に侍らせ玉座に座り、その前には金髪を短いツインにしクルクルと巻いた髪型をした女性 曹操 が居た。

「都からわざわざ賊退治とはご苦勞な事ね、曹操」

「ええ、本来なら私が出向く事は無いのだけれど賊共が貴女の領地に逃げ込んだとなれば話は別」

「ん#」

「放つて置けば、見す見す逃がしてしまうようなものですからね」

「ちょっと、それはどういう意味ですか#」

「袁紹、貴女が賊一匹も倒せない無能な領主と言っているのよ」

「な?!」

「曹操!袁紹様に向かって無礼であろう!いつくら本当の事でも面と向かって言つて良い事と悪い事があるんじゃない...」

「ちょっと!それってどういうことですよ!」

「い、いや、とっさの事でつい、本音が...」

「何ですって!#」

文醜は袁紹を怒らせてしまった。

「ふつ、無能な領主にマヌケな家臣とは良い取り合わせね、恐れ入ったわ」

「へん！参ったか！」

「ちよつと、今のバカにされてるのよ！私達！」

「そうなの？」

「あゝも」

「ぷっふふ」

文醜と顔良のやり取りに笑う曹操。その後、曹操は帰り袁紹達は屋敷の廊下を歩いていた。

「まったく、もう貴女達のせいで大恥をかいたじゃありませんの#」

曹操の前で大恥をかいた袁紹は怒っていた。

「貴女達って私は何も」

「けど、良いんですか？いくら曹操が来たからって賊の事を全て任せちゃって」

「良いんですよ。賊退治なんて汚れ仕事、あの小娘に遣らせておけば」

袁紹は止まり後ろに居る二人に振り返った。

「そんなことより、舞踏大会の方はどうなってますの？」

++++袁紹の屋敷を後にした曹操は家臣の長い髪をした女性 夏侯惇 と共に馬に乗り街の中を移動していた。

「華林様、袁紹殿はいかがでしたか？」

「相変わらずよ、名門の出であることにあぐらをかいて己の無能さに気づきもしない、あんな愚屈が領主として踏ん返り返っているかと思うと虫ずが走るわ。春蘭、兵達はどうしている？」

「既に門外にて待機しております。合流し次第、すぐに出発できます」

「そう」

「うわぁ！」

大きな声が聞こえ曹操がそちらに向くと鈴々が曹操に指を差していた。

「あの人、頭すっごいクルクルなのだ！」

「じ、コラー！」

隣に居た関羽が鈴々の口を手で塞いだ。

「失礼した！この者は髪のことを言ったのであって、その別に頭の中身がどうかで無く・・・」

「（華林と春蘭？だよな、何でここに・・・）」

一刀達も袁紹が治める町に居て偶然、曹操と鉢合わせたのである。
曹操は一刀達をじっくりと見た。

「（ん！）ふつ、子供の戯言、咎めるつもりはない」

「ふう」

「子供って」

「いいから」

「髪と言えば」

「え？」

「貴女も中々、美しい物を持っているわね」

「い、いや、これは他人に褒められるほどの物では」

「下の方もさぞかし美しいのでしょうね／＼」

「え？！／＼」

「（やっぱ、華林だな）」

「そうなのだ！愛紗は下の方もしっとりツヤツヤのだ！」

「こ、コラ！／＼な、何を言って！／＼」

「ふうん、それは是非に拝んで見たいものね」

「い、いや！／＼あ、あの！／＼そ、その！／＼」

「けど、今は野暮用が有って残念だわ。我が名は曹操、縁があったらまたいずれ」

曹操と夏侯惇は去って行った。

「何なんだ？」

「（あれが最近噂の曹操か、侮れぬ奴だ）」

「（相変わらずだな華林は春蘭の髪型が違うのには驚いたな）」

一刀達はお金を稼ぐため仕事を探しに移動した。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

一刀達から去った曹操達というところ。

「春蘭、感じたかしら？あの男の気配を」

「はい、感じました。相当の実力を持っているかと」

「手合わせしたら勝てるのかしら？春蘭」

「ギリギリ勝てるかどうか・・・」

「？！春蘭にそこまで言わせるなんて・・・欲しいわね」

曹操は獲物を見つけた狩人の如く笑みを浮かべた。

＋＋＋＋＋

「「「お帰りなさいませ、ご主人様なのだ」」」

一刀達が働く事になったのはメイド喫茶であつた。関羽、鈴々、星は接客をし、一刀は厨房で料理をする事になった。

「（何でこの時代にメイド喫茶が有るんだよ！）」

内心、ツツコミながら手際よく料理を作っていた。

「（流琉や祭さんに料理を教わっていて良かったあ、それより大丈夫かな愛紗達は）」

関羽達の方はというと。

「クツ、どうして私がこんな事を#」

「今日の宿代にも足りない有様なのだ、やむを得ない。探した中ではこの仕事が一番給金が良かったのだ」

「しかし、主でもない相手にご主人様と言わねばいかんとは・・・」

「お帰りなさいませ」ご主人様」どうぞ」こちらへ」さ、ご主人様」

入って来た客を相手にしてきた星が戻って来た。

「星、お主ちよつと上手くやり過ぎではないか？」

「腹が減つては戦は出来ぬ、先立つ物が無くてはこの先、旅も間々ならん。これも軍略の内だと思えば何て事はない」

「うゝん」

「お帰りなさいませ〜ご主人様〜」

「（恐るべき、趙子龍）」

上手くメイドに成り切る星を見て関羽は思ったのであった。

「お待たせしましたなのだ〜」

鈴々は客の注文で炒飯を持って来た。

「ええ！俺、大盛り頼んだんたけどこれってちよつと少くない？」

客が鈴々の顔を見ると口にご飯粒が付いていた。

「と、当店ではこれが大盛りなのだ」

「お前〜#」

「す、すみません！すぐに代わりをお持ちしますから〜」

「うわぁ〜！」

関羽が鈴々を裏方に連れて行った。

「客に出す物を運ぶ途中に手をつけるとはどういう了見だ！」

「だって、お腹が空いていたからつい・・・」

「ついじゃない、ちゃんとやらなきゃダメだろう！」

「えへへ、ごめんなさいなのだ、次からは気をつけるのだ」

とは言ったが、皿は割るは料理を台なしにするはでついに関羽に追
い出されてしまった。

「鈴々！ここはもういい！宿に戻って大人しくしている！」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ちょっと失敗しただけなのに酷いのだ！こうなったら何とかお金を
いっぱい稼いで愛紗をビックリさせてやるのだ！」

鈴々はふて腐れながら街を歩いて行くと、

「ん？」

道の脇で人だかりが出来ていて近付くと看板が立っており字が書い
てあった。

「うーん、難しい字が多くて読めないのだ」

「キ州一舞踏会、本日開催！飛び入り歓迎！優勝者には賞金と豪華
副賞有りだつてさっ！」

鈴々の隣に現れたのは長い髪をポニーテールにし先が十文字の様な型をした槍を持つ女性だった。

「優勝者には賞金！じゃあ、これで優勝すればお金がいっぱい貰えるのだな」

「いやゝまあ、確かにそうだけど、まさかお前本気で優勝するつもりじゃないんだろうな？」

「もちろん！本気なのだ！」

「大した自信だけど、それは無理だな」

「どうしてなのだ！」

「そんなの決まっているだろ、優勝するのはこのアタシだからさっ！」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

舞踏会会場。

そこには多くの観客が集まっていた。

「さあ、始めました！キ州一舞踏会！北は幽州から南は江東まで全国各地から集まった腕に覚えのある猛者が！最強の座をかけて競います！」

わあー！！！！

「それでは、試合開始に先立って本大会主催者をご紹介しますよう

！キ州太守にして超名門袁家の当主であられる袁紹様！」

わあ——！！

袁紹が登場し文醜と顔良が観客に向け 声呼歓 や 掌鼓 の看板を掲げる。

「皆さん！私、主催の舞踏会へようこそ！今日は全国から集まった豪傑達の闘いを心行くまで楽しんでいってくださいね！」

わあ——！！

再び文醜と顔良が看板を掲げ観客は声援をする。

「ありがと、ありがと。

名族袁家は「さあ、皆さん！袁紹様の有り難いお言葉を賜った所で第壹試合の開始です！」

袁紹の長くなる話を遮り司会者が先へ進めた。

+++++

第壹試合

「優勝候補の声もあるマサカリ使いの鉄牛選手！に対するは今回の参加者で最小もとい最年少の張飛選手！果敢にも飛び入り参加した張飛選手には是非、頑張つて欲しい所ですが相手が悪いかつ！」

鈴々の相手の鉄牛は大男で身長差は何倍もあり手には大きなマサカリを持っていた。

ゴォーン

ドラが鳴らされ試合開始。

「うおりやあゝ！」

鉄牛は鈴々に向けマサカリを振り下ろした。

「おおっと！鉄牛選手、先手をとった！早くもこれで決まっ・・・ああ！」

ガァキーン

「受け止めたあ！張飛選手、常人では持ち上げる事も敵わないあのマサカリの一撃を受け止めましたあ！」

「このガキイ！」

「この程度なら鈴々には敵わないのだあ！とおりやあゝ！」

「ガハア！」

鈴々の一撃で鉄牛は場外に吹っ飛び気を失った。

わあー！！！！

「や、やりましたあ！張飛選手！優勝候補の鉄牛選手を破りましたあ！これは序盤から大判狂わせです！」

「はあゝ」

袁紹は退屈そうにあくびをしていた。

+++++

第弐試合。

ゴォーン

「さあ！続いては第弐試合！既に開始から一分が経過しています！
只今、絶賛武者修行中の馬超選手は遙か西の西涼よりの参加です！」

先程、鈴々と共に居たポニーテールの女性だ。

「一方、相手は槍の名手との事ですが・・・」

「りゃあ！」

ガァキーン

槍の名手の女性は次々と突きを放つが馬超はそれを防いでいく。

「おおっと！これはすごい！目にも止まらぬ速技だあ！馬超選手は
防戦一方です！」

「はあ・・・はあ・・・」

「何だ？もう終わりか？」

「なにい？！」

「ふつ、今度はこっちは行かせてもらっぜ！てええい！」

「くっ！」

馬超の猛攻に槍の名手は倒れた。

「安心しな、急所は外した」

わぁー！！！！

「・・・」

袁紹は横になっていた。

+++++

ゴォーン

「やりましたあ！張飛選手！見事、秒殺！」

「すごいっ！馬超選手！圧勝です！」

「小さな巨人、張飛選手！ついに決勝に王手をかけたあ！」

「準決勝も一撃で決めた、馬超選手！新たな神話の誕生かあ？！」

次々と対戦相手を倒す鈴々と馬超は決勝戦へと勝ち進んだ。

+++++

決勝戦。　ゴォ　ゴォ　ゴォーン

「キ州一舞踏会も等々、最後の試合です！並み居る強豪を打ち倒して決勝の場にコマを進めたのはこの二人い！先ずは驚異の小旋風、張飛！それに対するは西涼の暴れ馬、馬超！今大会最強を決める闘いも終に決着！注目の決勝戦はこの後すぐ！！」

袁紹の席には 所厠 と書かれた看板があつた。数分後、戻つて来た袁紹は退屈そうな顔だつた。

「まさか、本当に決勝に昇つてくるとはなあ、ハア！タア！かかつてこいつ！」

馬超は 銀閃 を振り回し構える。

「お前に勝つて、優勝賞金は鈴々が貰うのだ！うりゃあ！ふんっ！」
鈴々も負けじと 蛇矛 を振り回し構え、二人は
激突する。

「たあ！」

「ハア！」

ガアキイン

「ふう！」

「そりゃあ！」

ガアキイン

鈴々と馬超の激しい攻防戦が続く中、袁紹は寝そうだった。

「中々、やるのだあ！」

「そつちもな！」

「すごい！これはすごい！決勝戦に相応しい激闘だあ！」

「（なんだ？このチビ、ちっこいくせにどうして強いだ！でも、一番強いのは）・・・アタシだあ！」

グウ

「な？！」

鈴々のお腹が鳴り馬超は気が抜け 銀閃 を床に刺してしまった。

ハッハハハ！！

「え、えへへ／＼／」

会場は笑いに包まれ鈴々は恥ずかしながらお腹を摩った。

「えへへ、じゃない！真面目にやれ！」

「ごめんなのだ」

「まったく#勝負の最中にお腹が鳴るなんて緊張感が グウ なの？！／＼／」

「ああ！」

ハッハハハハ！

馬超のお腹も鳴り会場は再び笑いに包まれる。

「両者、そこまで！」

「「え?!」」

今まで退屈にしていた袁紹が突如、言った。

「この勝負、引き分け！よって両者を優勝とします！」

袁紹のいきなりの行動に文醜と顔良は急いで声援の看板を掲げた。

わぁー！！！！

観客の声援で気分を良くした袁紹。

「（ようやく、私の出番ですわ）それでは閉会の言葉を私が・・・ええ?!」

袁紹が見ると既に観客は誰ひとり居なく舞踏会は流れ解散で終わった。

+++++

その頃の一刀達はというと仕事が終わりに宿に戻って来た。

「鈴々、大人しくしていたか？」

「鈴々？」

関羽は自分の泊まっている部屋に入ったが鈴々の姿がない。関羽の後に続き星も入って来た。

「どうしたのだ？愛紗」

「星、鈴々を見なかったか？」

「いや、見ておらぬ」

「何処へ言ったのだ、鈴々は」

「一刀殿に聞いたらどうだ」

「そうする」

関羽は一刀が泊まっている部屋に行った。

「北郷殿、鈴々を知道吗？」

「鈴々ですか？見ていませんがどうかしましたか？」

「それが部屋に居ないんです」

「そうなると外に居るでしょうね」

「どうでしょう」

「今日はもう、遅いですし鈴々なら大丈夫ですよ」

「しかし・・・」

「俺が探しておくので安心して下さい」

「・・・分かりました。お願いします、北郷殿」

「任せて下さい、関羽殿」

関羽は自分の部屋に戻って行った。

「ふう、よしっ！」

一刀は目を閉じ集中した。

（鈴々の気は・・・あった・・・ん？この気は翠に麗羽に猪々子、斗詩の気だ・・・何で鈴々と一緒なんだ？）

「場所は分かったから明日、迎えに行くか」

一刀は寢床に入り寝た。

+++++

袁紹の屋敷では鈴々と马超は袁紹に招待され食事をこ馳走になっていた。

「おいしいのだあ〜」

「うめえ〜」

「おっほほほ！良い食べっぷり沢山召し上がれ、それにしても今日の貴女達の闘いぶりは本当に見事でしたわ！」

「いや〜」

「そこで貴女達に相談なんですけど、もし良かったら我が袁家の客将になって頂けませんこと？」

「「ん？」」

「客将って何なのだ？」

「う〜ん？まあ、簡単に言えばお客さんみたいなもんだな〜」

「ふ〜ん、客将になったら毎日こんなご馳走を食べられるのか？」

「おーっほっほっほ！もちろんですわ！朝昼晩と最高の料理人が振るった料理をお出ししますわよ」

「だったらなるのだ！」

「少し間ならいいかな〜」

「おーっほっほっほ！！」

そのやり取りを扉を少し開け文醜が見ていた。

+++++

顔良の部屋。

顔良は鏡に向かって自分のお腹のお肉を摘んでいた。

「うーん、ここんどこ出陣してないから運動不足かしら？」

バン

「斗詩！大変だ！」

「何よ！猪々子、いきなり入って来ないでよ！」

「麗羽様、どうやら馬超と張飛を召し抱えるつもりみたいだぞ！」

「良いじゃない、あの二人強いしきつと戦力の増強に・・・」

「何のんきなこと言ってんだ！今ではアタイ達、麗羽様の側近だけれども、もしあんなバカ強い相手が入って来たら・・・」

「た、確かにそうね」

「ど、どうする？！」

「どうするって言われたって・・・ああ！そうだ！」

自分達の居場所の危機を察した顔良は思い付き文醜に耳打ちをした。

++++++
鈴々と馬超は袁紹の屋敷にそのまま泊まった翌日の朝。文醜と顔良は袁紹に話をした。

「張飛と馬超を召し抱えるのをやめろですって？」

「い、いいえ、そうは言っていないのですけど」

「あの二人の強さは昨日貴女達も見たでしょう？あれだけの豪傑を配下にすれば、きつと曹操の鼻を明かせてやれますわ」」「武勇に優れているのは認めます。あの二人、強く賢く美しくを掲げる袁紹軍の将に相応しいかどうか」

「ふん、確かに余りお上品とは言えませんがね」

「「ですよね」」

「（私達もバ族出身で人の事言えないけど）っで、そこで一つ提案があるのですけど」

「提案？」

「はい、馬超と張飛が麗羽様の配下に相応しいかどうか試験をするんです」

「なるほど、適性試験というわけね」

「はい！」

「良いでしょう」

「「ああ」」

「（ようし！これであの二人に無理難題を吹っ掛けて試験に失格したからってお払い箱にすれば）」

「では、試験の課題は私が出します」

「「ええ?!」」

「それで、あの二人と勝負しなさい」

「勝負・・・ですか?」

「勝つて、貴女達があの二人より優れている事をお見せなさい、そうすれば今まで通り私の側近は貴女達・・・ただし、もし負けたりしたら」

「負けたりしたら?」

文醜が聞き返したら袁紹は手で首を切る動作をしながら言った。

「これよ!こ・れ!」

「ええ!それって斬首?!」

「違うわよ!クビよ!お払い箱って事よ!」

「なんだ!良かった、良かった・・・って、ええ?!」

+++++

試験会場。

「さあ!突発的に始まった袁紹軍適性試験!張飛、馬超の新参組とお馴染みの文醜、顔良組があ!強さ!賢さ!美しさ!の三つを競います!」

わぁー！！！！

「では、まず賢さの試験から」

袁紹の合図で舞台にはイス、マジックハンド、吊されたバナナが用意された。

「って、これは／＼／」

「アタイ、こういうのは苦手だよな」

「いや、苦手とかそういう事じゃ無くて」

文醜と顔良が会話している間に鈴々が動いた。

「あれを取るぐらいなら簡単なのだ！こうやって」

鈴々はイスをバナナが吊してある真下に動かし乗り手を伸ばした。

「あれ？届かないのだ」

それを見ていた顔良は呆れ顔した。

「馬鹿だな！こういう時は道具を使うに決まってるんだろ！ほら！」

馬超はマジックハンドを拾いそれを使って取ろうとしたがギリギリ取れない所を見ていたが顔良は我慢ならず動いた。

「あのこれって、こうやってこうすれば簡単なんじゃ」

顔良はイスを動かし、その上に乗りマジックハンドを使いバナナを取った。

「ほう！」

「その手が有ったのだ！」

「どうだ！知力34の力を見たか！ダアッハハ！」

「うゝ、勝ったのに何か嬉しくないゝ」

賢さ試験は文醜、顔良が勝利した。

「次は我が配下に不可欠な美しさの試験ですわ！おーっほっほっほっほー！」

舞台裏の控室には色々な衣装が用意されていた。

「面白い服がいっぱいなのだ！」

「まいったな、私。お洒落とかあんまり・・・」

馬超は渋々、服を選んだ。

「さあ！そろそろ準備が出来たようです！それでは先ずは張飛、馬超組です！」

「ガオーガオガオなのだ」

ハッハハハハ！

鈴々はトラの着ぐるみを着て登場、会場は笑いに包まれた。馬超の方は見事な着こなしで登場した。

おおー！！！！

「あんま・・ジロジロ見んなよ／＼私・・こういうヒラヒラしたのは似合わないって分かってるんだからな／＼／」

「え、ええと馬超選手、一部の観客に激しく受けておりますが！それでは、観客の皆さん！審査、お願いします！」

美しさの試験は観客の丸の札の数が多い方が勝ちのルールであり観客達は一斉に札を上げた。

「なお、集計は九州野鳥の会の皆様にご協力頂いています！」

双眼鏡を片手に会員達が丸の数を数える。

「集計の結果が出ました！８７点！かなりの高得点！果たして、文醜、顔良組はこれを越えられるのか！」

舞台袖の文醜、顔良は。

「ちっ、中々やるな、あの二人」

「ねえ、本当にこの格好じゃなきゃダメなの？！」

「今さら、何言ってるんだ！一か八か、こいつで勝負だ！」

「でも、やっぱり」

「行くぞ！」

「乱世に乗じて平和を乱す賊共め」

「漢王室に代わって成敗よ」

某少女達の衣装で文醜、顔良は登場だが完全な場違いで会場は冷めた。

これには袁紹も引き、司会者も面倒臭さがりながら言った

「えゝそれでは、審査をお願いしまゝす、あゝ以外に点数が伸びませんねゝ 87対13で張飛、馬超組の圧勝です！」

「やったゝ！」

「ゝ・・・ゝ」

文醜と顔良は色んな意味で死んだ二人は舞台裏の控室でも沈んでいた。

「負けた」

「色々捨てて頑張ったのに負けちゃったあゝ」

最後の強さ試験。

「では、最後は両者に強さを競って貰います！」

二組はそれぞれ武装をし立っていた。

「ただし、武器を取って撃ち合うのではなく、我が袁家に代々伝わるこの華麗で優雅で壮麗な白鳥の回しを締めて女相撲で決着を着けてもらいますわ」

「『ええー！』」

袁家を取り出したのは回しに白鳥が付いた物であり、着けるに恥ずかしい物だが勝負は勝負、文醜と顔良は回しを着け張飛、馬超組を待っていた。

「えゝ盛り上がって来ましたゝ泣いても笑ってもこれが最後の闘いですが張飛、馬超組の登場がまだ・ん？え！」

司会者に近づいた男が何やら耳打ちをした。

「え、えゝここで残念なお知らせです、只今入った情報によりますと張飛、馬超組はこの最終試合を棄権するとの事です！」

「『ええ！』」

「この程度で逃げるとは華麗で優雅で壮麗な我が袁家の家臣は勤まりませんわ、二対一で文醜、顔良組の勝利とします！」

わあー！！！！

「勝った！私達、勝ったのね！」

「ああ！アタイ達は勝ったんだ！」

「代わりに何か大事なものを失った気がするけど勝ったのね！」

「「うわあ〜！」」

袁紹軍適性試験は幕を閉じた。

+++++

一方、棄権をした鈴々と馬超は。

「いや〜いくら何でもアレは勘弁して欲しいよな〜」

「さすがの鈴々もあれはきついのだ〜」

鈴々と馬超は鈴々の泊まっている宿に向かっていた。

「鈴々〜！」

道の向こうから一刀が走って来た。

「お兄ちゃんなのだ！お兄ちゃん〜！」

鈴々は一刀に向かって走り抱き着いた。

「おっと！一晩も宿に戻らなかったから心配したぞ」

「えへへ♪ごめんなさいなのだ、お兄ちゃんこそ何でここに居るのだ？」

「迎えに来たんだよ」

「そうだったのか、ありがとうなのだ♪お兄ちゃん♪」

「え、ええと張飛、誰なんだ？」

馬超が一刀の事が気になり聞いた。

「お兄ちゃんは鈴々のお兄ちゃんなのだ！」

「はあ?!」

「（やっぱり、翠だったか）初めまして俺の名は北郷一刀、鈴々の義兄だ」

「ああ、アタシは馬超だ。よろしくな、北郷」

「鈴々、早く帰えるぞ！関羽殿が怒っている」

「わ、わかったのだ！」

「あ、あの〜アタシも一緒にいいのか？」

「大丈夫な・・・はずなのだ！」

「本当か？どうなんだ、北郷」

「まあ、なんとかするよ」

三人は急いで宿に帰った。

++++++++
一刀達が泊まっている宿。

「た、ただいまなのだ」

「コラーー!!」

「うにゃあ?!」

「今まで何処にいたのだ!ちゃんと宿で大人しくしていると言ったのにフラフラと居なくなっは一晩、帰って来なくて北郷殿が探してしてくれたのだぞ!」

「ごめんなさいなのだ」

「全く心配をかけて、北郷殿もすみません。探しに行つて下さつて」「良いんですよ、それよりお願いが・・・」

一刀が言つと後ろから馬超が出てきた。

「ん?お主は?」

「あ、どうもアタシ馬超つて言つんですけど」

「馬超はね、鈴々の新しい友達なのだ!」

「は、はあ」

「実は馬超を相部屋にして欲しいですよ、関羽殿」

「相部屋?!」

実は鈴々と馬超は賞金を受け取らずに帰ってしまったので馬超はお金がないため泊まる所が出来ない、かと言って一刀と相部屋はさすがにまずいので

「お願いします！」

「鈴々からもお願いなのだ！愛紗！」

「アタシからも頼む！」

三人は頭を下げ関羽にお願いをする。

「どうする？星」

「私は別に構わぬが」

「北郷殿の頼みでもあるし・・・馬超、私達の部屋に泊まって行け」

「い、良いのか！ありがとな、関羽！」

「良かったのだ！馬超」

「ありがとな、張飛。それに北郷も」

「別に構わないよ」

関羽と星の了承を得て馬超は泊まる事が決まり、一日は終わった。次の日、馬超の事で事件が起こる事を一刀達は知る予知もなかった。

第四話 張飛、馬超と相打つこと（後書き）

どうだったでしょうか？

一刀を無理矢理に入れた感じがしたでしょうか？

感想、アドバイスをお待ちしております。

第伍話 馬超、曹操を討たんとすること（前書き）

20000PV突破！！

文才無き、自分の小説にアクセスしてくれるとは

ありがとうございます！今回は、ちょっと書きづらいお話でしたが、何とか修正しながら完成させました。

では、どうぞ！

第伍話 馬超、曹操を討たんとすること

十年前、西涼の馬超の家の庭で幼い馬超は父親の馬騰と共に稽古をしていると長い木の棒を持ち構えていた馬超の手が震える。

『翠、お前何か隠し事してるな？』

『な、なに言ってるだよ！アタシ、今朝オネシヨなんて・・・あつ！／／／』

『ハッハハハ！そうかそうか、隠し事はオネシヨか』

『け、けど何で分かったんだよ！アタシが隠し事してるって』

『武術というのは正直なものだ。心にやましい所があれば、それが気の濁りとなって現れる』

『それじゃあ』

『ああ、お前の構えには心気の曇りが感じられた』

『ああ』

馬超は落ち込み、下を向いた。

『どうした？オネシヨの事ならそんなに気に病む事はないぞ』

『そうじゃないよ、父ちゃんはアタシの構えを見てアタシの気持ちが分かったのにアタシが父ちゃんの気持ちが分かんなかったのが何

か悔しくて』

『何だ、そんな事か・・・大丈夫！お前もちゃんと修行すれば、すぐに気が読めるようになる』

『本当にい！』

『ああ、もちろん』

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「父ちゃん・・・アタシ、いっぱい練習するから・・・ん？夢か」

「やっと、起きたか」

朝になって起きた馬超は寢床の下から声が聞こえ見ると星が床に居た。

「な、何でそんなところに寝てんだよ？」

「好きでこうしている訳では無い、寝ている間にお主に突き落とされたのだ」

「ええ？！わ、悪い！アタシ、寝相悪くって」

星は馬超と一緒に寝て、隣の寢床は関羽と鈴々が寝ている。

「なに、そう謝る事ではない。お返しに私もお主が寝ている間に・・・いや見た所、生娘のようだし 何をしたかは黙っておこう」

「って、寝ている間にアタシに何かしたのか?!おいつ!」

その後、関羽と鈴々も起き着替え終わった四人は一刀と合流し朝食を食べいた。

「やあ、相部屋させてもらった上に飯までおごってもらって悪いな」

「気にする事はないのだ!旅は道連れ、世は?・・・世は情けないって言うし」

「世は情けだ!まあ、二人部屋に無理言って四人泊まらせ貰っているのは情けないと言えは情けないが・・・」

「かと言って俺の部屋に泊まらせるのはマズイからね」

「やはり、愛紗が一刀殿と相部屋になるべきではなかったかな?夫婦仲良く」

「な?!///懲りずにまた何を言っているかぁ!///星い!///」

「夫婦?!///あ、アタシ聞いてないぞつ!///北郷と関羽がふ、夫婦だつて!///」

「うむ、馬超には言っ てなかったがな一刀殿と愛紗は夫婦なのだ」

「 ■ @ ▼ ● つ ! ? 」

「さらに鈴々は二人の娘なのだ」

「□▲●×っ!？」

「星いゝ#」

「（星の悪い癖だよな）」

「はにゃあ？」

その後、朝食を済ませた一刀達はそれぞれ仕事に行った。

+++++

町の外。

賊退治に來た曹操軍の天幕があり、その中心の天幕では猫耳フードが特徴の曹操軍軍師 筍イク が居た。
そこへ曹操が入って來た。

「華琳さま、戦況の方はいかがでしたか？」

「圧倒的ね我が軍は、わざわざ私が出る幕ではなかったわ」

「随分、汗をおかきになっていますわ。すぐにお拭きしますね・・・
あっ」

手ぬぐいを取りに行こうとした筍イクの腕を曹操が掴む。

「ええ、ただし手ぬぐいでは無く桂花、貴女の舌で」

「え／＼か、華琳さま／＼でも・・・／＼／」

「どうしたの？もしかして、いや？」

筍イクは首を横に振った。

「それじゃあ」

玉座に座り片腕を上げ脇を見せる曹操。

筍イクは曹操の脇の下へ顔を近づけ、舌で汗を舐めていく。

「ぺろっ・・・ぴちゃぴちゃっ、ぺろっ」

「そうよ／＼・・・ふふっ、また上手くなったのね／＼」

曹操の汗を舐めとる筍イク。

「華琳さま・・・あっ」

そこへ夏侯惇が入って来て見たのは筍イクが曹操の足の指を舐める所だった。

「・・・ん／＼」

筍イクは夏侯惇が居るのが気になり、舐めるのを止まった。

「桂花、続けて」

「はい／＼・・・ぺろっ・・・ぴちゃぴちゃっ」

「春蘭、何か報告があるんじゃないの？」

「は、はい！敵主力はほぼ殲滅、首謀者も捕らえて今は夏侯淵の部隊が残敵の掃討に当たっています」

「そう、ご苦労様。下がっていいわよ」

「はあ」

+++++

数十分後、賊の首謀者を袁紹に渡すため町の大通りを移動していた曹操軍を脇で多くの町民達が見ていた。

「どうしたの？春蘭、まだすねているの？」

先頭に居る曹操が後ろに居る夏侯惇に問う。

「別にすねてなどいません」

「そんなにむくれないで、今夜は桂花では無く貴女を閨に呼んであげるから」

「な、何を言つて／＼／私は何も／＼／そ、そんな／＼／な、何だ！秋蘭、何を笑っている！」

「ふっ」

夏侯惇の隣には前髪を片目側だけ伸ばし夏侯惇の赤色とは対となる青色の服を着た妹の 夏侯淵 が微かに笑っていた。

+++++

「荷物運びのお仕事、思ったよりお金が貰えて良かったのだ」

「ま、なんつってもアタシの働きが良かったからな！」

「それだけじゃないのだ！鈴々もいっぱい頑張ったのだ！」

鈴々と馬超は仕事が終わりに町を歩いていたら前方に人だかりが出来ていた。

「ん？何なのだ？」

二人は人だかりを抜けるとちょうど町の大通りの道で曹操達が馬でこちらに近づいて来る所だった。

「あ、曹操なのだ！」

「え、曹操？！」

「こんにちはなのだ！」

「お前はこの前の」

曹操と聞き驚く馬超。

駆け寄った鈴々に気づき曹操は止まる。

「今日あの黒髪の者は一緒では無いのか？（あの男も居ないわね）」

「愛紗はお仕事中なのだ」

「ほう、あの者は愛紗と言っのか？」

「愛紗は真名で、名前は関羽なのだ！」

「（あの男の事も聞いておこうかしら）一つ聞こう、貴女と一緒に居た男の」

「曹操っ！覚悟っ！」

馬超が曹操軍の兵士から槍を奪い曹操に襲い掛かった。

ガァキーン

「何奴っ！」

曹操に届く寸前に夏侯惇が幅広の刀 七星餓浪 で防ぎ、同時に夏侯淵は曹操に抱き着き馬上から離れた。

「西涼の馬騰が一子っ！馬超、推参っ！」

「えっ！？」

「父の敵っ！取らせてもらっぞっ！」「よすのだ！ケンカはダメなのだ！」離せ！邪魔するなあ！」

夏侯惇に襲い掛かる馬超に鈴々は飛び付いた。

「何をしているっ！引っ捕らえろっ！」

「「「はっ！」「」「」

夏侯淵の命令で兵士達は槍を手に马超を取り囲む。

「ちっ！」

取り囲まれた马超は手が出せず捕らえられた。

+++++

残りの一刀達はまたメイド喫茶の働いていた。

「（ん！この気は秋蘭と鈴々、どうしたんだ？）」

一刀が厨房で鈴々と夏侯淵の気を感じ不思議に思っていると関羽が来た。

「北郷殿！」

「どうかしましたか？」

「少しお話が」

「ん？分かりました」

一刀は関羽と裏方へ行くと鈴々と星と夏侯淵が居た。

「お兄ちゃん！」

「どうしたんだ？鈴々」

「马超が、马超が捕まっちゃったのだ！」

「（翠が?!）」

「詳しい事情は私が説明しよう」

「（やっぱり、秋蘭か）貴女は？」

「私は夏侯淵、曹操様の家臣だ」

「俺の名は北郷一刀と言います」

「一刀殿が来た所で夏侯淵殿、御説明を」

「分かった、実は・・・」

夏侯淵は馬超が起こした事を説明した。

「（翠が華琳を・・・）」

「なるほど、そうでしたか。分かりました、馬超は私の妹分の友。このまま棄て置く訳にはいきません。とりあえず会って話してみましよう」

「俺も行きます」

「分かりました。私と北郷殿は曹操殿の所へ出向いて馬超に会って来る。鈴々は星と一緒に宿に戻っていてくれ」

「どうしてなのだ！鈴々も行って馬超を取り戻すのだ！」

「短気なお主と一緒にでは纏まる話も纏まらなくなるだろう、ここは一刀殿と愛紗に任せておけ」

「でも！」

「鈴々、絶対に馬超を取り戻す！だから、待っていてくれ」

「分かったのだ、お兄ちゃん」

「任せろ」

一刀は鈴々の頭を撫でた。

「では、行こうか」

一刀と関羽は夏侯淵の案内で曹操の元へ行く。

「（絶対、取り戻すからな・・・翠！）」

+++++

曹操軍野営場所。

「ここに馬超を捕らえている」

夏侯淵の案内で一刀と関羽は曹操軍野営場所のとある一角の天幕に来ていた。

「ここに馬超が・・・」

「入りましょう」

二人が中に入ると木製の檻の中で馬超は居て、二人に気づいた。

「関羽、北郷」

「話は聞いた」

「アタシとした事が血が上り過ぎて、ドジ踏んじまった。まさか、あんな所で出くわすなんて思ってもみなかったし、おまけに張飛が邪魔しやがるから・・・」

「鈴々は馬超の事を想って邪魔をしたんだよ」

「それでも！」

「お主、なぜ曹操殿を殺そうと」

「曹操は我が父を・・・アタシの父ちゃんを殺したんだ！」

「えっ?!」

「（やっぱり、馬騰さん絡みだったか）」

「それも卑劣極まりないやり方で！」

動揺が隠しきれない関羽とは別に大体の検討がついていた一刀。その後、二人は曹操の居る天幕へ向かった。

「（あの華琳が殺したとは考えられない、だとすると真実はいったい?）」

＋＋＋＋＋

「華琳さま、関羽殿と北郷殿が参られました」

「通しなさい」

二人は天幕の中へ入り、曹操は玉座に座っていた。

「曹操殿」

「意外だったわ、こんな形で貴女と再会するなんて・・・隣の貴方も」

「単刀直入にお聞きますが、馬超をどうなさるお積りです？」

「もちろん、斬るわ」

「そんな?!」

「(そうなるよな)」

「理由はどうかあれ、この曹操の命を狙ったんです、それなりの報いを受けてもらうわ」

「いや、だが!」

「官軍の将の命を狙ったのよ?無罪放免とはいかないのよ」

「それは、そうだが」

「（状況が状況だ、不利過ぎる）」

「曹操殿！馬超の命、何とか救っては頂く訳には参られないか？」

「関羽、そこまで馬超を助けたいのなら私と取引しない？」

「取引？」

「そう今夜一晩、私と閨を共にするの。そうすれば、馬超の命助けてあげても良いわ」

「な、何を馬鹿な／＼／」

「（そう来るか、華琳）」

「初めて見た時から貴女の艶やかな黒髪を手に入れたと思っていたの」

「・・・」

「そして、私は欲しいものはどんな手を使っても手に入れる」

「ひ、人の命が懸かっているのにそんな戯けた事／＼／」

「そう！貴女の気持ち一つで人が救えるのよ？」

「！？」

俯き悩む関羽に曹操が言った。

「関羽、そこまで悩むなら取引をもう一つだけ増やしてあげるわ」

「もう一つ？」

「そう」

曹操は隣に居る一刀を見ながら笑みをした。

「貴方、名は？」

「北郷一刀と言います」

「珍しい名ね」

「よく言われます」

「北郷、私の物になりなさい！」

「?!」

「（何で？華琳には実力を見せていないのに）」

「私は不思議に思うわ、貴方が噂にならず、野に居るとは勿体ないわ」

「自分はそれほどの者ではございません」

「私をごまかせ無いわよ、家臣も感じたのよ貴方の相当の実力を」

「・・・」

「初めてよ、男を欲しがるなんて・・・さっきも言った通り、私は欲しい物はどんな手を使っても手に入れる」

「・・・」

「貴方が私の物になるのなら馬超の命が助かる、これがもう一つの取引よ、どちらか選びなさい」

「（俺が華琳の物になれば翠が助かるのなら）・・・曹操殿、貴女に仕え「北郷殿！ダメです！」

「関羽殿」

「鈴々とずっと一緒に居ると約束したではありませんか！なのに・・・」

「（・・・愛紗）」

「どうするの？関羽が今夜一晩だけ私と閨を共にするか、北郷が私の物になるか、選びなさい！」

曹操に向き直り関羽は決心した。

「ほ、本当に！一晩、閨を共にしたら馬超は助けてくれるのだな！」

「ええ、約束するわ」

「すみません、関羽殿」

「いいえ、馬超のためですし・・・そ、それに北郷殿のためでもありますし／＼／」

「ん？」

関羽が最後に言った言葉は小さい声で言ったため一刀には聞こえなかった。

「秋蘭、関羽を案内しなさい」

「御意。関羽殿、こちらへ」

「はい」

関羽は夏侯淵に案内され

出て行き、曹操と一刀だけが残された。

「今回は貴方を物に出来なかったけど、次は必ず貴方を物にするわ！」

「・・・」

「誰かある！」

「はっ！」

曹操が兵士を呼ぶ。

「北郷を空いてる天幕に案内しなさい」

「御意っ！」

「貴方も一晩、過ごして行きなさい」

「ありがとうございます、曹操殿」

一刀は兵士に案内されて行く。

「（愛紗、すまない）」

+++++

曹操専用寢床がある天幕

「・・・／／／」

天蓋が付いた寢床に服を何も着けておらずシーツだけ被っていた関羽。

カーテン越しから曹操の影が見えた。

「そ、曹操殿／／／本当にこれで馬超を／／／」

「約束は守ると言っただでしょ？」

曹操は羽織っていたガウンを脱ぎ捨て、裸になり寢床へ入って行く。

「あ／／／」

曹操に背を向ける関羽。曹操はピッタリと関羽の背中に張り付く。

「もしかして、初めて？」

「ん、ん／＼／」

関羽は頷ずいた。

「ますます気に入ったわゝてつきり、私は北郷と既にもう・・・」

曹操は関羽の大事な所へと手を伸ばす。

「！？／＼／」

「本当にしつとり、ツヤツヤなのね」

目を閉じ我慢している関羽の上に曹操は被さるような姿勢になった。

「ん／＼／」

「ふっ、恐がることはないわ」

関羽は目を開け、曹操に顔を向ける。

キラ

「きゃっ！」

「はあ！」

天井に輝き見えた関羽は曹操を突き飛ばした瞬間、手に刃物を持った刺客が襲い掛かり関羽は寸前で刺客の攻撃を防いだ。突き飛ばされた曹操は起き上がり刺客の存在に気付いた。

「曲者だ！であえっ！」

刺客は関羽の上から飛び離れ煙り玉を投げ逃げた。

「華林さまっ！」

ボワン

煙りの中、入って来た夏侯惇が急いで歩み寄る。

「華林さま、ご無事ですか？！」

「私は大丈夫だ！それより、賊を追え！」

「はっ！」

夏侯惇は急いで兵士を引き連れ、賊を追った。

＋＋＋＋＋

曹操の暗殺を失敗し、逃げている刺客の目の前に一人の男が現れた。

「華琳を暗殺しようとするとはいい度胸だな#」

「！？ッ」

現れたのは一刀だった。刺客の気配に気付き、先回りをしたのだ。

刺客は目の前にいる一刀の発する圧力に押さえ付けられ動けずに居た。

「覚悟は出来ているんだよなあ#」

「くっ、ガハア！」

自害しようと舌を噛み切ろうとしたが、一瞬で背後に移動した一刀が手刀をして意識を刈り取った。

「華琳を狙ったお前を殺したい所だがお前を生かして華林達渡さな
いといけないからな」

一刀は舌を噛み切れないように刺客の口に手ぬぐいを噛ませ、手足を結んでいる所へ夏侯惇率いる部隊が追って来た。

「なぜ、貴方が?!」

「怪しい気配を感じ、探していたら鉢合わせたので捕まえおきました」

「感謝します、北郷殿。連れて行けっ！」

「「「はっ!」「」「」

刺客を渡した一刀。

兵士達は刺客を連れて行つた。

「関羽殿と曹操殿は無事でしたか？」

「お二人共、無事です」

「良かったあゝ俺達も戻りましょうか！」

「は、はい」

一刀と夏侯惇は野営場所へと向かった。

+++++

曹操と関羽はガウンを羽織り、中心にある天幕に居た。

「華林さま」

「関羽殿」

そこへ一刀と夏侯惇が入って来た。

「北郷殿、なぜ夏侯惇殿と？」

「春蘭、賊は？」

「はっ！北郷殿が生け捕りにしました」

「なっ?!」

「えゝそう（さらに欲しくなったわね）」

一刀の功績に驚く関羽。一刀を見ながら笑みをする曹操。

「曹操殿、先程の刺客はいつたい？」

「出る杭は打たれる。都では、私を煙たく想う者が多くてね、でもまさか、こんな所まで刺客を放ってくるなんて、油断したわ」

曹操が席を立ち、天幕から出て行こうとする。

「邪魔が入って興が削がれたわ、今夜はもう寝た方が良さそうね」

「あの、曹操殿」

「関羽、北郷。刺客の手より私を救い刺客を捕らえた事、礼を言うわ、褒美として馬超の命、助けてとらす」

「曹操殿！」

「ただし！私はまだ、あなた達の事は諦めていないわ、関羽のその美しい黒髪に北郷の武、必ず手に入れ見せるわ！だから、その時を楽しみにしていなさい」

曹操は一刀と関羽に背を向けたまま出て行く。

「春蘭、馬超を引き渡してあげて」

「かしこまりました」

夏侯惇の案内で二人は馬超の元へ向かった。

「夏侯惇殿、一つ聞いてもいいですか？」

その道中に一刀が聞いた。

「私に答えられる事なら何なりと」

「曹操殿が馬騰殿を殺したとは事実なのですか？俺にはそうとは思わなくて」

「私もお聞きしたいです」

夏侯惇は足を止めた。

「北郷殿、関羽殿。これから私は独り言を言う、あれは数年前・・・」

夏侯惇は話し始めた。

+++++

「都で、何進大將軍の屋敷に招かれた時だった」

『曹操』

『何でしょう？』

『妾は、そなたの事を知謀の資と思うておったが聞けば、剣の腕も中々と』

『恐れ入ります』

『どうじゃ？この中の者と太刀おうて、その腕前を見せてもらえぬか？』

『大將軍の仰せとあらば』

立ち上がった曹操。

何進は周りの者を見る。

『馬騰殿、如何であろう？』

『お臨みとあらば』

『お待ち下さい』

馬騰が引き受け立とうとしたら曹操が止めた。

『お見受けした所、馬騰殿はかなり酔いが回られている御様子、座興とはいえ剣をお取りになるのは』

『何も、このぐらい飲んだ内には入らぬ』

そう言つて立つ馬騰だがふらついており、尻餅をついてしまった。

《クスクスッ》

周りの者から笑い声が聞こえた。

『どうやら、曹操の言つように馬騰殿は少し酔わられているようじやな、無理をせぬほうがよからう』

『クッ！』

「満座の中で恥をかいたのを紛らすためか、その後、馬騰殿は浴びるように酒を飲まれ、宴が果てた後、供も連れず一人お帰りになられたんだが、その途中で・・・」

《ドサツ》

馬騰は馬から落ちてしまった。

「そこをたまたま、夜間の警備をしていた私の一隊が見つけたのだ、落ちた時に頭を強く打たれたのだろう、既に虫の息で・・・」

『酔って馬から落ちて死んだなどと永遠の恥、この事は内密にしてもらいたい』

馬騰はその言葉を最期に命を絶った。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「その場に居た者には堅く口止めたのだが、どこかで見た者がおったのか、しばらくすると妙な噂が・・・」

「妙な噂？」

「そう、我が主が恥をかかれた腹いせに馬騰殿を襲わせたと」

「どうしてそんな？」

「我が主はその、少し誤解されやすい所があつて、それでこうした事が起こると口さがない者共が悪い噂を立てるのだ」

「馬超はその悪い噂を信じてしまったと」

「そうだと思われる」

「しかし、それなら真実を明らかにせぬのだ！」

「（まさか、華琳は）」

「私も何度かそう申し上げたのだが、我が主は『西涼にその人ありと言われた、馬騰程の武人が最期に口にした頼み、聞かない訳にはいかぬだろう』と」

「（やっぱり）」

「それに父の武勇を誇りに想う子に父のそんな死に様を知らせなかったかもしれない・・・はっ！いやっ、これはあくまで私の勝手な想像なのだが」

「しかし、それでは曹操殿が！」

「そういうお人なのだ、あの方は・・・」

「（変わってないな、華琳は）」

「夏侯惇殿」

「ん？」

「先程の独り言、馬超の前でもう一度してはもらえぬか？」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ガァン

「そんな？！父上が・・・アタシの父ちゃんが酔って馬から落ちて死んだなんて」

馬超は一刀達から真実を聞かされ、檻に拳をぶつけ座り込んでしまった。関羽はそんな馬超の肩に手を置いた。

「馬超、曹操殿は馬騰殿、そして、お主の事を想ってこの事を黙っておられたのだ。武人としての体面を重んじる馬騰殿の気持ち、それを尊重して自ら悪評を引き受けた曹操殿の振る舞い、いずれも立派なものだと思う」

「関羽殿の言うとおりだと俺も思う。馬超、真実を受け入れて復讐やめろ、馬騰殿はそんな事を望んではない」

「嘘だっ！曹操の手下の言うことなんて信じられるかっ！」

「ほう、それでは私が偽りを言っているか？」

「夏侯惇殿！馬超は今、取り乱していて、馬超、お主の気持ちは分かるが少し落ち着い」「さわるなっ！」「・・・っ？！」

馬超は関羽の手を払いのける。

「大方、お前達も丸め込まれたんだろ！上手く事が運んだら、召し抱えてもらっ約束でもされたか！」

「いい加減にしろっ！」

「「「っ?！」」」

突然、一刀が馬超の胸ぐらを掴む。

「いつまで復讐の事を考えてるだっ！信じられない気持ちは分かるっ！けどな、いい加減、前を見て歩けっ！」

「うるさいっ！お前に何が分かるっ！」

「言っても分からないようだな！武器を持って表へ出ろっ！その根性、叩き直してやるっ！」

「望む所だっ！」

「北郷殿！馬超！」外へ出る一刀と馬超を関羽と夏侯惇はすぐにを追った。

+++++

野営場所から少し離れた場所、一刀は 鴉 を馬超は曹操軍から借りた槍を持ち、構えていた。

「二人共よせっ！こんな無益な争いをして何になる！」

関羽は二人が止めるように問い掛けるが。

「関羽殿、今の馬超にはこのぐらいしないと分からないですよ！どうした？馬超、来いっ！」

「ほざけっ！」

止める気がない二人。

関羽は隣に居る夏侯惇に話し掛ける。

「夏侯惇殿からも二人を止めるように言ってお下さいっ！」

「それは無理だ、関羽殿。武人として、一騎打ちに手をだす気はない」

「しかし！」

関羽はただ、見守るしかない。

「（北郷殿・・・）」

互いに構えたまま動かない一刀と馬超。

「（何だ？全然、隙がない！修羅場を何度も乗り越えた透き通る水のような気が・・・あっ！）」

『武術というのは正直なものだ。心にやましい所があれば、それが気の濁りとなって現れる』

一刀の気を読んだ馬超は昔、馬騰が言っていた言葉を思い出し手元が震え始めた。

「それじゃあ、本当に父ちゃんは・・・くっ」

馬超は構えを解き座り込んだ。

「分かってくれたんだよな、馬超。本当の事に」

「う、うわぁ〜ん」

馬超は一刀に抱き着き、泣いた。

落ち着いた馬超を連れ、一刀と関羽は鈴々と星が待つ宿へ帰って行った。

+++++

朝。

一刀達は町を出て次の町へと向かう道中の別れ道に差し掛かり、馬超と別れる事となった。

「ここで、お別れだな」

「せっかく、友達になれたのに残念なのだ」

「やはり一度、西涼に戻るのか？」

「ああ、故郷の連中に本当の事を教えてやんなきゃなんないから」

「そうだな、それがいい」

「関羽と北郷には色々世話になっちまって」

「いや、それほどでも」

「別に構わないよ」

「それから、その」

馬超は一刀と関羽の腕を掴み、鈴々と星から距離を取り二人の耳元で言った。

「アタシが泣いちゃったことは、秘密にしといてくれよ、特に張飛には絶対っ!」

「ああ」

「分かったよ」

「そ、それと北郷! / / /」

「ん? どうした、馬超」

「そ、その私の事は翠って呼んでくれっ! / / /」

「えっ! 良いのか?」

「い、良いから呼べよっ! 北郷っ! / / /」

「分かったよ、翠、俺の事は一刀って呼んでくれ(ニコッ)」

「□▲●×っ! ?」

「ん?」

「じゃ、じゃあなっ! / / / あばよっ! またな」

翠は顔を赤くしながら走り去って行った。

「じゃあな！翠〜！」

「バイバイなのだ〜♪」

一刀と鈴々は笑顔で翠に手を振る。

「一刀殿も罪なお方だな、愛紗」

「ふんっ！私には関係ないっ！／＼／」

一刀達は翠が見えなくなるまで見送りました。

第伍話 馬超、曹操を討たんとすること（後書き）

どうだったでしょうか？ちょっと最後辺りの一刀の入りが無理矢理だったでしょうか？

感想、アドバイスをお待ちしております。

第六話 一刀と関羽、化け物を退治せんとするのこゝ（前書き）

一ヶ月以上もお待たせしてしまった方々、申し訳ございませんでした。

では、どうぞ！

第六話 一刀と関羽、化け物を退治せんとするのこ

馬超と別れ、山越えをしている一刀達。

先頭を歩く鈴々は楽しそうに自作の歌を歌っていた。

「山があるから山なのだ」 川があっても気にしない」

「おい、余り変な歌を大声で歌うな、恥ずかしい／＼」

「何を言っているのだ愛紗。山を歩く時は熊除けの歌を歌った方がいいのだ。じっちゃんがそう言ってたのだ！」

と振り返って関羽に言った鈴々は再び前を向いて歩き出した。

「そうだ。こんな山の中で愛紗と鉢合わせたら、熊が驚くだろう？」

「そうそう、こんな所で私にばったり会ったら、熊がかわいそうって、何でだっ！」

「（愛紗がノリツッコミ!?）」

「あ！ ほ、北郷殿！ これは、その／＼」

星にノリツッコミをする関羽に驚く一刀。一刀が見ているのに気付く関羽は恥ずかしがり、焦りだす。そんな関羽を見て、星はニヤついていた。

「な、何だ！！ 星、私の顔に何か付いているか？」

「いや、公孫贄殿のより、やはりお主の方が面白いと思つてな」

「は、ははは」

「（相変わらずだな………ん？ この気は）」

星の言葉に関羽は顔を引きつらせる。

一刀は感じた事のある気に気付いた瞬間。

きやあああ！！

「「「「！！っ」「」「」

どこからか聞こえた悲鳴に一刀達は悲鳴の聞こえた方へ急いだ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ひどい、私を騙したんですね」一刀達とは少し離れた場所で一人の少女が賊三人に囲まれていた。

「別に騙しちやいねえさっ！」

「でも、村への近道を教えてくれると言つたのにこんな所まで連れてきて」

「近道は教えてやるよ。でも村へのじゃなくて、天国へのだけだなっ！」

「て、天国！ それでは、私を殺すつもりなのですね」

「「「うへへっ!」」」

賊達が下品な笑い声をあげる。

「そうじゃねえよっ! 気持ち良くして、天にも昇る心地にしてやるつもりなのですよ」

「ほう、お前が連れて行ってくれる天国とは大層、良い所らしいな?」

「そりゃあ、もちろ……えっ?」

関羽に話し掛けられた賊は気付き、声が聞こえた方へ振り向くと一刀達が居た。

「何だ? オメエらっ!」

「聞いて驚け! この者こそ噂と違って、絶世の美女では無いので気付かぬかも知れぬが」

「おいっ!」

「黒髪の子盗りだ!」

「クッ!」

星の言葉にツツコム関羽だが星は気にせず、言い切った。それを聞いた賊は顔をしかめ、少し後ずさる。

「弱い者イジメする奴は許さないのだあ!」

「私も貴様達の様な無粋な台詞を吐く輩は嫌いだなあ#」

「残念ながら、天国には案内してやれぬが、この青龍偃月刀で地獄に送ってくれるっ!」

「(何で彼女が此処に?) お前達の悪行を見過ごす訳にはいかない、大人しく倒させてもらうっ!」

「やれるもんならやってみやがれっ!」

武器を構える一刀達に賊は怯まず襲い掛かるが、

「地獄へっ!」

「行っつ!」

「来ますっ!」

賊は呆気なく倒され、空へ飛んで行った。

「ざまあみるなのだ」

そこへ襲われていた少女が近づいてきた。

「助かりました、ありがとうございます。あんな恐そうな人達をあとという間にやつつけてしまうなんて本当に皆さん、お強いんですね」

「いや、何! / / / それほどでも / / / 」

関羽は照れ臭そうに答える。

「あつ、申し遅れました私は……………えつと……………トントンと言います」

「トントン？（何で偽名を名乗るんだ？）」

「は、はいそうです」

一刀に聞き返されたトントンは慌て答えた。

「鈴々と似てて、良い名前なのだ」

「そ、そうですか？」

自分の名前と似てて喜ぶ鈴々にトントンは少し苦笑いだった。

「私は関羽」

「鈴々は張飛なのだ」

「趙雲と言います」

「……………」

関羽、鈴々、星の順番に自己紹介をしたが、一刀は黙ったままトントンを見ていたのでトントンから声を掛けてきた。

「貴方さまは？」

「北郷一刀と言います」

「どうです？ トントン殿、村の方へ行かれるのなら我々と一緒に参りませんか？」

「宜しいのですか？」

関羽の申し出に喜ぶトントン。

「気にすることは無いのだ！ 旅は道づれ、世は………世は？」

「酔わせて何をするつもりだ」

星が変な口調で鈴々に吹き込んだ。

「そうそう、それなのだ！」

「違うつ！」

ペシッ

「えへ」

「それでは、意味が分かったらろっ！」

関羽は鈴々の鼻に軽くデコピンでツツコミを入れた。

「少々、騒がしいけど良いかな？」

「いえ、楽しいですね」

一刀の問いにトントンは笑顔で答えたのであった。一刀達はトントンを連れ村へ向かった。

＋＋＋＋＋

董卓の屋敷。

眼鏡をかけた董卓軍軍師 賈馱 は手に書簡を抱え、執務室に入った。

「ん？ 月？ 月？ どこにいるの？」

室内の中を見回すが、仕事をしているはずの賈馱の幼なじみでもあり、この辺りの太守でもある 董卓 が居なかった。

「あの子だったら、また性懲りもなく抜け出したのね。まったく、この忙しい時に」

怒りながら賈馱は執務室から出て、廊下を歩いていると、

「あつ、華雄將軍！」

「何だ、賈馱ではないか。浮かぬ顔でどうした？」

廊下の突き当たりで会ったのは銀髪を短く切り揃えた董卓軍の猛将 華雄 だった。

「月が、董卓様がまた居なくなってしまうわれて」「と言うと、また例のアレか？ お忍びで下々の暮らしぶりを見て回るといふ」

「ええ」

「やれやれ、仕事を放り出して、フラフラ出歩くとは困った太守様だな」

「領民と直に触れ合つて、その声を聞くのは決して悪い事ではないつ！」

「なら、別に良いではないか」

「そうはいかないわっ！　ここの所、地方の賊の征伐に人手を取られて、逆にこの辺りの治安が悪くなっていると言つのにっ！　それに物の値段が上がつて、民の間に不満が募つてるし！　山の方では人食い熊が出るとか何とかっ！」

賈駆は頭を掻きむしつた。

「賈駆、そんなに心配ばかりしていると早死にするぞ？」

「華雄將軍。貴女は悩みが無い分、長生きしそうねえ」

「まっ！　体は鍛えているからなっ！」

「はあ」

皮肉で言つたのに気付かない華雄にため息をする賈駆であつた。

+++++

一方、一刀達は村に向かつて歩き続けている途中であつた。そこでトントンは向かつている村の話をしていた。

「え！ 化け物！？」

「はい。ある日、村の庄屋様の門に白羽の矢が打ち込まれ、それに結び付けられた文に

『今宵、村の外れのお堂に食べ物をお供えよ、でなければ、村に災いが降り懸かるであろう』

と書いてあったとか、最初は質の悪いイタズラと思い、そのままにしていたらしいのですが、朝になってみると山から運んで来たのか門前に大きな岩が忽然と置かれていて」

「ほう」

星が興味深そうに相槌をした。

「これは、とても人の力で持ち上がる物ではない、化け物の仕業に違いないと」

「「んっ！」」

関羽と鈴々の顔が少し強張る。

「それで、慌ててその夜。御堂に食べ物をお供えたら、それから七日に一度の割合で催促の矢文が打ち込まれるようになったとか」

「なんと、奇怪な」

「ですけど、これは町で聞いた噂、本当かどうか確かめたくて」

「（だから、村娘の格好をして此処にいるのか）」

「しかし、トントン殿。なぜ、そのような事を？ただの娘が思い付きでする事とは思えぬが」

ちょうど村の近くまで来た所で、星がトントンに質問した。

「えっ！」

「（ヤバいつ！）」

「えっ、そ、それは「おい、何だ！？ あれ！」

星の質問に慌てるトントンをフォローすべく、一刀は村の中に置かれていた大きな岩を見つけ、指を差した。

「あ、あれが例の岩なのですね！ い、行ってみましょう！」

「あっ、待つのだ！」

「トントン殿！」

トントンが走り出したのを関羽と鈴々は急いで追いかけた。

「（ふう、とりあえず話を逸らしたけど）」

「一刀殿」

内心、安堵する一刀だがその場に残っている星が話し掛けてきた。

「何かな？ 星」

「トントン殿について、何か知っているのではないですか？」

「それは、その（やっぱり星はごまかせないか）」

「刀はどう言っていていいか悩むが、」

「まあ、聞かないでおきましょう」

「ありがとう、星」

「何をやっているのだ〜！ お兄ちゃ〜ん！ 星〜！」

話し合っていた二人に鈴々の呼ぶ声が聞こえる。

「我らも行きましょう」

「ああ」

「一刀と星は関羽達を追いかけた。」

「岩の側に来た一刀達。」

「岩は庄屋の家の門を隠すように置かれていた。」

「きっと、これが化け物が置いて行った岩なんですね」

「「うっ！」「」」

話に出た岩と知り関羽と鈴々が驚く。

「（微かに気の跡がある。しかもこの気は……）」

「一刀殿、どうかなされたかな？」

岩に触れたまま動かない一刀に星が声を掛けた。

「いや、何でもない。それより庄屋殿に話を聞きに行こう」

さっそく、一刀達は庄屋に話を聞くため、庄屋の所へ行った。

+++++

庄屋の家。

「庄屋様、それでは化け物が出るといふのは本当だったのですね」
客間に通された一刀達は庄屋に化け物について話していた。

「はい、困り果ててお役人様に訴えてみたのですが、化け物が出たなどと怪しい事を言って、御上（役所）の手を煩らさんなつと逆にお叱りを受ける始末」

バン

「そんな酷い事を！」

「「「!?」」」

「（まあ、彼女が怒るのも当然だな）」

トントンが机を叩き、立ち上がった事に一刀以外は驚き、トントンは自分のした事に気づき、静かに席に座った。

「オッホン！　それで村の力自慢の若者や旅の剣客らに頼んで、化け物を退治して貰おうとしたのですが、いずれも這う這うの体で逃げ帰って来て」

「そ、そんなに恐ろしい化け物なのですか？」

顔を引きつらせながら関羽は聞いた。

「しかと、姿を見た者はありませんが、ある者は身の丈が三十で紅く光る目をしていたと言い、またある者は鋭い牙と爪を生やしていたと言い、全身毛むくじやらで恐ろしい唸り声をあげていたと言う者もあり」

「「うう」」

庄屋の話を聞き関羽と鈴々の顔は青ざめた。

「いったい、この村はこの先どうなってしまうのか……………」

「こういつ時こそ、我らの出番だな！」

「「ええ！？」」

「どうした？　お主達から言っていたが」

驚く関羽と鈴々に星は疑問を持った。

「お願い出来ますか？」

「しかし、相手は正体不明の化け物」

「この方達は、恐ろしい山賊をあっという間に倒してしまうほどお強くて。ですからきっと、化け物相手でも自信がお有りなのでしょう」

「ほう！ならば是非！」

トントンの話を聞き、庄屋は関羽達の方へ向く。

「い、いや、そんな勝手に決められても」

「そ、そうなのだ！ 鈴々にも都合があるのだ」「そうだ！ ほ、北郷殿はどう思いますか？」

「そ、そうなのだ！ お兄ちゃんはどうするのだ」

「俺は引き受けてもいいと思うよ」

「北郷殿！？」

「お兄ちゃん！？」

必死で断る関羽と鈴々は頼みの綱の一刀に聞くもあっさり失われた。

「ダメなのですか？」

「「うつ」」

そんな二人にトントンは潤んだ瞳で見つめる。

「ダメ、という訳ではないが……」

関羽の先程の勢いが無くなる。トントンは更に瞳を潤ませ、見つめる。

「お願いします。村の方々が困っておられるのです」

「しかし」

「お願いします」

「そう言うことならば」

「良かった、引き受けて下さるんですね」

「いや、その……」

口を滑らせた関羽。

トントンは関羽の側へ行き、手を握る。

「ありがとうございますっ！」

「はあ」

「うう」

「ふっ」

引き受ける事になった関羽と鈴々の顔が青ざめているのを見た星は不適な笑みをした。

「（星の奴、絶対何かする気だな）」

それを横で見た一刀は思ったのであった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

その夜。

一刀達は荷車に貢ぎ物を乗せて御堂に行く庄屋と数人の村人に同行していた。

「二人共、少し震えておるが、もしかして怖いのか？」

その道中、松明を片手に持った星が一刀の両隣にそれぞれ居る関羽と鈴々に話し掛けた。

「（やり始めたか）」

「こ、怖くなんかないのだっ！」

「その通り！こ、この震えはその、武者震いだっ！」

「ほう、そうか？」

「な、何だ！？何か文句あるのかっ！」

「いや、別に・・・うむっ！」

「「ひいい！？」」

ぎゅっ

「（痛いっ！）」

突然、声を出し足を止めた星に二人は驚き、一刀の腕を強く掴んだ。

「どうしたっ！ 何か出たのかっ！？」

「いや、せっかく月が綺麗だったのに雲が出て来たなと思ってな」

「何だ、そんなことか」

「はっ！」

「「ひい！」」

ぎゅう

「（痛いっ！ 痛いってばっ！？）」

「今度は、何だっ！？」

再び歩き続けた所で、また星が止まった。

「昨日、茶店で団子を食べた時にお主、私より一個多く食べていなかったか？」

「まあ、確かそうだったかもしれないが今、そんな事を思い出さなくても」

「ふっ」

星は再び歩き出した。

「お主、わざとやっているだろう#」

「（俺の腕、もつかない?）」

そんなやり取りをし、一刀達は御堂に到着。

食べ物御堂の中に運び終わった庄屋は一刀達の方へ向く。

「それでは、お頼み申し上げますぞ」

「う、うん」

「化け物退治、頑張ってくださいね」

「ど、ドーンと任せるのだっ!」

そう言う関羽と鈴々だったが顔は引きつっていた。トントンと庄屋達は村へ帰って行き、一刀達はお堂の中へ入った。

「これはまた、いかにも何か出そうだな」

御堂の中を見渡す星。

中は薄暗く、仏像がロウソクの明かりに照らされ、不気味な雰囲気を出していた。

一刀達は円になるようにその場に座った。

「さて、化け物が出るまで、ここで待つか」

「そ、そうだな」

若干、声を震わせながら答える関羽。

その手は隣にいる一刀の服の袖を掴んでいた。因みに反対側の鈴々は腕に抱き着いていた。

「そういえば、あれもこんな月が無い夜だったな」

「……」

いきなり話を始めた星に関羽と鈴々の体が強張る。

「日のある内に、山を越えるため歩き続けたのだが、道を間違えたのか、行けども行けども人里に出ず、これはもう野宿をするしかないと思った頃、何処からか春先にしては生暖かい風が吹いて来て」

「……」

ぎゅっ

「どれほど眠ってしまったのか、カリカリッと何かを引っ掻く音で私はハッと目を覚ました。最初は天井裏でネズミが起てる音だと思ったが、よく耳を澄ましてみると、どうやらそれは真新しい棺から聞こえて来るらしい」

「……ん！」

ぎゅっ

「（痛いっ！）」

雰囲気を出しながら、しゃべる星の話を聞く内に一刀の腕を掴む関羽と鈴々の手に段々と力が入る。

「嫌な予感を覚えつつ、それでも何故か、まるで吸い寄せられるかのように私は棺の蓋に手を掛けて、恐る恐る中を開けて見ると・・・」

「ん!」「」

「うわぁぁぁぁ!」

「ぎゃぁぁぁ!」

ぎゅううう

「（死ぬっ!）」

「あう」「」

ドサッ

「はぁ・・・はぁ・・・死ぬかと・・・思った」

星のいきなりの大声に驚いた関羽と鈴々。一刀に強く抱き着き、気絶してしまった。

一刀は抱き着かれた時に鈴々の腕が首に締まり、気絶しようとしたが何とか持ちこたえ、二人の拘束から抜け出た。

「大丈夫ですか？ 一刀殿」

「やり過ぎだよ、星」

「これは失敬」

「気絶しちゃったよ、二人共。大丈夫かな？」

気絶した関羽と鈴々を気遣う一刀。

「早く二人を起こそう、いつ化け物が来るかわからないし」

「それでしたら、私にお任せください」

「またやり過ぎるなよ」

「ふっ、どうですか？」

「（また何かする顔だな、あれは）」

一刀に不適な笑みをした星は口ウソクを一本だけ手に取り、倒れている関羽と鈴々に近づいた。

「愛紗！鈴々！」

「んっ？」

「めえゝをおゝさあゝまあゝせえゝ」

「「いやあああー！」」

目を覚ました二人が見たのは手にした口ウソクを顔の下から照らした星の顔で、二人は驚き外へ出てしまった。

「はっははは!!」

「星、またやり過ぎ」

爆笑する星に一刀が声を掛ける。

「やはり、愛紗は面白いですなっ!」

「はあ、外に出ちゃったから二人を追い・・・ん!? (この気は)」

「きゃあああ!!」

「うにゃああ!!」

「「!?!」」

一刀が覚えのある気を感じた瞬間、関羽と鈴々の悲鳴が聞こえた。

「今の声はっ!?!」

「とにかく、外へ!」

一刀と星は外へ出ると、気絶し倒れた関羽と鈴々の前に赤く目が光る影があった。

「やっと、お出ましか」

雲に隠れた月が顔を出し暗い辺りを照らしだす。

照らされたその場には、化け物では無く、白い虎の毛皮を被って顔を隠し、手に方天戟（三日月状の刃が片側に付いた槍の一種）を手に持ち立っている少女だった。

「正体を現したな！」

「（やっぱり、彼女か）」

「そこに倒れている二人と違って、私はそんな物で驚かされたりせぬぞ」

「（だとしたら、彼女がこんな事をする）」

「はあ！」

「止せっ！ 星い！」

一刀が咄嗟に制止するが、星は 龍牙 を手に虎の少女に向かって走って行った。

「はあ！」

ガアキイン

「っ！？ 何だ？ この重い一撃は」

星の攻撃を虎の少女は横の一振りだけで防ぐ。

後ろに飛ばされた星は、苦痛な顔をし、再び虎の少女へ向かって行く。

「ふっ！」

ガアキイン

「・・・」

ガアキイン

「くっ！」

鏝ぜり合いとなり、虎の少女の力が圧倒的に強く星は押される。

「（こいつ、強い！ だが）」

星は諦めず、攻撃するが全て防がれる。

ガアキイン

「（しまった！？）」

虎の少女の一撃で、星の 龍牙 は飛ばされてしまった。

「（やられるっ！）」

「・・・」

星にとどめの攻撃がされる瞬間。

ガアキイン

「星！ 大丈夫か！」

「一刀殿！」

一刀が二人の間に入り、 鴉 を抜き虎の少女の一撃を防いだ。

「一刀殿、この者」

「ああ、かなり強いな（やっぱり強いな、君は）」

「・・・」

割って入って来た一刀に警戒する虎の少女。

「星！ 一旦、退却するぞっ！」

「何故ですか！？ 一刀殿！！ 私と一刀殿なら奴を倒せるかも知れぬのに！！」

「今、闘ったら関羽殿と鈴々を巻き込んでしまっただから一旦、退却ぞ！」

「っ……………承知した！」

「行くぞ！ ハアア！」

ドカアン

「……………！？」

ブウン

一瞬悩む星だが、一刀の案が正しいと判断した。一刀は氣を纏わせ
た 鴉 の一撃を地面に放ち、目眩ましの砂煙を起こした。虎の少
女はいきなりの砂煙に一瞬だけ怯むが、すぐに砂煙を槍で振り払っ
た。

「……………」

振り払ったその場には、一刀と星の姿も倒れていた関羽と鈴々は無
く、虎の少女は辺りをきよきよと見回した後、御堂にあった貢
ぎ物を持って暗い林の中へと消えた。

+++++

翌朝。

昨夜、戻って来た一刀達は庄屋の家に泊まらせてもらい、トントン
と一緒に朝食を食べていた。

「何！？ 化け物ではない？」

「ああ、紛れも無くあれは人間だ」

「己へ謀りおつてゝ # しかし、そうと分かればもう怖くない！」

「やはり、そうと分かるまでは怖かったのだな」

「い、いや！ そ、それは！」

「（愛紗は苦手だもんな、そういう類いのものは）」

星の凶星に言われた関羽を一刀は見えて思った。

「と、とにかく！ 化け物で無いのなら、次に会った時は必ず成敗してくれる！」

「こてんぱんにしてやるのだ！」

「確かに奴は化け物では無い。だが、強さは化け物並だ。」

「化け物並」

リベンジに燃える関羽と鈴々に言った星の言葉にトントンは復唱するように呟いた。

そんな中、一刀は黙ったまま手の平にある昨夜、退却する際に拾った犬の木彫りを見ていた。

「（恋^{れん}）」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

その昼間。

一刀達は虎の少女の消息を掴むため御堂の近辺を搜索していた。

「しかし、ここまでついて来なくてもトントン殿は村で待っていてくれ、良いのに」

関羽と一緒に手掛かりを探すトントんに言った。

「相手が化け物ではないのなら、こんな事をする理由があるのかも、それだったら話を聞いて」

「あつた！」

星が近くの茂みから奥へと続いている足跡を発見した。

「これが奴の足跡だ」

「あちらの方へ続いてるようだな」

「行ってみるのだ！」

一刀達は足跡を辿って、奥へと進んだ。広い場所に出た一刀達は辺りを見回した。

「おい、アレ！」

関羽が指差す先には住家にするには最適な洞窟があり、その前では焚火の跡が残っていた。

「うむ。おそらく、アレが奴の住家だ」

ガサガサッ

「ん！ 関羽殿！」

ガアキイン

一刀達が洞窟に近づいた。その時、後ろの林の中から虎の少女が関羽に襲い掛かって来たのを一刀が防いだ。

「早く後ろに隠れるのだ！」

「は、はい！」

鈴々に言われて、トントンを後ろに下がった。

「気をつける、奴だ！」

気を引き締めて言う星に関羽と鈴々の手に力が入る。

「昨日、勝手に気絶した二人」

虎の少女が関羽と鈴々を見て言った。

「さ、昨夜は不覚を取ったが、今度はそうはいかぬぞ！」

「鈴々の強さ、思い知らしてやるのだ！」

「貴様、化け物で無ければ名があるう？」

「呂布、奉先」

星の問いに答えながら、呂布は被っていた虎の毛皮を脱いで、素顔を見せた。ショートヘアの赤髪で、二本だけ髪の毛が触角のように伸び立っていて首には長くて赤いスカーフを巻いている少女だった。呂布は、名前を言った後に攻撃を仕掛けて来た。

ガッキン

「くっ」

呂布の攻撃を正面から受けた関羽は顔をしかめる。

「うりゃああ〜！」

ガッキイン

「……………」

そこへ鈴々が横から攻撃を仕掛けるが、あっさりと防がれてしまった。

「こんなの初めてなのだ」

「な、何だ！？ コイツは！」

呂布の強さに驚く関羽と鈴々。

「だから言っただであろつ。強さは化け物並みだと……………はあっ！」

「はあっ！」

ガッキイン

「……………」

「うりゃああ〜！」

ガッキイン

関羽と星の攻撃に続くように鈴々が上からの攻撃を呂布は画戟を振

り回し弾き返した。

「お前達、弱い」

「俺を忘れているよ！」

ガキイイン

「……………っ！」

関羽、鈴々、星の三人の攻撃を一通り防いだ呂布に一刀の一撃が呂布を初めて後ろに押した。

「お前、昨日逃げた奴」

「戦略的撤退って言うんだよ」

「お前、強い」

一刀の攻撃を受けた呂布が目の色を変えた。

「本気、出す」

「ああ、俺も出すよ」

「……………ふっ！」

「はあっ！」

ガキイイン

「…………っ！」

「はっ！」

ドゴン

「…………すごい」

「お兄ちゃん、強いのだ」

「これが一刀殿の本気」

一刀と呂布の激しい攻防に関羽、鈴々、星は驚いていた。

「…………っ！」

ブウン

「ふっ！」

ガキイン

「ワンっ！」…………っ！」

「なっ！」

一刀が避けた呂布の一撃は一刀の後ろにあった木を斬った。その斬った木は洞窟から出て来た呂布と同じスカーフを首に巻いた犬へ倒れて行く。

「危ないっ!!」

そこへ後ろに下がっていたトントンが駆け寄り犬を守るように抱きしめた。

「……………っ!」

「（月ええ!!）」

ドゴオン

斬り倒された木がトントンと犬を下敷きにしたと思われたが、

「くっ」

「うう」

間一髪、関羽と鈴々が食い止めていた。

「だめよ、くすぐったいわ」

トントンと彼女の顔を舐めている犬にも何処にも怪我は無かった。
関羽と鈴々は木を退けて、一刀達の方へ歩いて来る。

「お前達、良い奴。良い奴とは戦えない」

呂布はそう言いながら、武器を降ろした。

「そうか。呂布」

「……………」

「訳を話してくれないか？ 君が村人に貢ぎ物を差し出させていた訳を」

「……………わかった」

一刀達は呂布に話を聞くため、洞窟の前で焚火をするかのように円となって座り、一刀は呂布に昨夜拾った犬の装飾品を渡した。

「村人に食べ物を買がせていたのは、犬のエサにするためだったんだな」

「自分でエサ代を稼ごうとした事もあったけど」

+++++

それはメイド喫茶で働いていた時だった。

ガラガラッ

『あ、あの……………』

『お帰りのさいませ、ご主人様』

無表情な呂布の接客に入ってきた客は気まずい顔をした。

注文取りにおいても、

『ええと、俺、炒飯と餃子ね』

『俺も同じの。ただし、炒飯は大盛りで』

『俺は坦々麺。あと、春巻も』

『俺は、回鍋肉に白飯。それから玉子スープ』

『……………コクッ……………ラーメン四丁』

『『『『ええ！』』』』

と言った具合で、仕事が続く訳が無くクビとなった。

+++++

「全然、ダメダメなのだ」

「お前が言っな」

前科のある鈴々が言える事では無いと、関羽がツツコム。

「しかし、子犬一匹飼うのにあれだけの食べ物はいらぬだろう？」

昨夜、供えた食べ物荷車で運ばなければならない量だった。

「一匹だけじゃない」

「えっ？」

星の疑問に答えるように呂布は口笛を吹くと、洞窟の中から二十匹近くの犬達が出て来た。

「こ、これは確かに」

「友達、たくさん。皆捨てられたり、怪我したりかわいそうで、ほっとけなかった」

呂布は自分と同じ赤いスカーフをした犬 セキト を抱き、暗い顔をした。そんな呂布にどう声を掛けるべきか、悩んでいると馬のいなく声が聞こえた。

「あつ！ 月っ！」

「あら、詠ちゃん」

「（詠っ！？ 背が違っだろっ！！）」

護衛の兵士を連れた賈馱がこちらに向かって走ってくるのを見て、トントンは駆け寄った。

一刀は自分の知っている賈馱とは違う姿に驚愕していた。

「あら、詠ちゃんじゃないっ！ 連絡が来るまで僕がどれだけ心配したか」

「ごめんなさい」

「下々の声を直接聞きたいとは立派な事だけど、もし危ない目にも遭ったりしたら」

「それなら大丈夫。今回はこの方達に助けて貰ったから」

トントンは一刀達の方を向いて言った。

「って、 危ない目に遭ったの!？」

「うん、少しだけ」

「ええ!？」

「お取り込み中、申し訳ないが、お主は一体？」

話が全く分からない関羽が声を掛けた。

「我が名は賈馱、字は文和。こちらにおられる太守の董卓様にお仕えしている者だ。」

「「「ええ!？」」」

関羽、鈴々、星はトントンがまさかの太守だと知り驚愕した。

そうトントンの正体は、この辺りを治める太守 董卓 なのだ。

「それで、化け物の件は？」

「もう解決しちゃった♪」

「ああ、そう」

笑顔で答える董卓に拍子抜けの賈馱であった。

+++++

董卓の屋敷。

謁見の間には一刀達と呂布並びに犬達、そして庄屋が董卓を待つて

いた。

「皆さん、お待たせしました」

「（綺麗だな、月）」

そう言つて賈馱と共に董卓は今までの村娘の格好では無く、気品ある服装を着て現れた。

皆、その姿に見入り庄屋は今までの董卓の行動に納得していた。

「なるほど、そう言うことでしたか」

「確かに呂布さんのした事は良くない事です。ですが、それは全て傷つき捨てられた犬達を救うため、決して悪心から出たことでは無いのです。門前の岩もすぐ退けますし、出来る限りの償いをするそうです。そうですよね、呂布さん？」

「……………コクッ」

呂布はしっかりと頷いた。

「分かりました。既に本人からも謝つて貰ったことですし、村人からも私の方から話をして見ましょう」

「そうして頂けると助かります……………所で、詠ちゃん。役所では、化け物が出て困るという訴えを取り合わなかったとか」

「ええと、それは」

賈馱はどう答えて良いか、しどろもどろになる。

「董卓さま、その事は既に済んだ事ですので」

「いいえ、良くありません。どんな些細なものであれ、民の訴えを疎かにせぬのが政の基本なのですから」

庄屋に申し訳なさそうに董卓は言った。

「かしこまりました。今後、そうした事がないよう全ての役人に厳しく申し付けます」

「良いでしょう。それから……………」

董卓は扉の前に居る犬達に顔を向けながら言い出した。

「あの子達、私の所で飼ってあげる訳にいかないかしら？」

「つて、あの犬全部を!？」

董卓の要求に驚く賈馱。

董卓は手を組み、お願いをする。

「詠ちゃん。この間から最近、街の治安が悪いのは、警備の兵士が足りなからだつて言ってたでしょ？ だから、あの子達をちゃんと躡けて街の警備の手助けをして貰うの。どう良い考えでしょう？」

「そりゃあ、ちゃんと躡ける事が出来れば泥棒除けにはなるかもしれませんが……………」

「それなら、大丈夫。呂布さん、犬達の躡けお願い出来ますか？」

「……………コクッ」

董卓の問い掛けに頷く呂布。

「待つて、月！ 僕はまだ飼って良いとは……………」

「ダメ、なの？」

「うっ」

潤んだ瞳で賈馱を見上げる董卓。

「お願い……………」

「うっ、いや、それは」

呂布と犬達も一斉に賈馱を潤んだ瞳で見詰める。

「……………分かった。飼うよ」

「詠ちゃん！ だぁ〜い好きい♪」

了承を得た董卓は賈馱に抱き着き、頬ずりをする。

「ちよっ、月！ だぁ〜い好きって……………い、言っとくけど、こんな無茶なお願いは今回だけだからねっ！ 本当にもう絶対に……………ちよっど、何だ！？」

突然、無言で抱き着き、頬ずりをする呂布に賈馱は戸惑った。

「きつと、お礼の気持ちを表しているのだ」

鈴々が何も言わない呂布に代わって言った。

「って、だったら口で言え！………懐くなっ！」

ずっと賈馱に頼ずりを董卓と呂布にその場に居た皆は笑いあった。

+++++

董卓の屋敷門前。

村へと帰った庄屋に続くように一刀達も次の村に向かうため門前に居た。

そこには一刀達を見送るため董卓達も居た。

「北郷さん、関羽さん、張飛さん、趙雲さん。道中、お気をつけて下さいね」

「董卓殿。ただの旅の武芸者である我らに御見送りなどと……」

「いいえ。皆さんには大変、お世話になったのですから当然です」

と関羽に笑顔で答える董卓。

すると董卓の隣に居た呂布が一刀に近づいて来た。

「呂布、どうした？」

「……………恋^{れん}」

「ん？」

「恋の真名は、恋」

「真名を預けてくれるのかい？」

「……………コクッ」

「どうして？」

「恋と同じくらい、強いから、だから」

「……………分かった。俺の事は一刀って呼んでくれ。」

「……………コクッ」

しっかりと頷く呂布。

「じゃあな、恋」

「一刀、また会える？」

「ああ、会えるさ」

「……………約束」

「ああ、約束するよ」

「……………コクッ／／／」

「オッホン！ 北郷殿、行きますよ」

顔を赤くしながら頷く恋。二人の間の雰囲気には痺れを切らせた関羽がわざとらしく、咳払いをした。

「わ、分かりました。じゃあな、恋」

「……………一刀、元気でね」

「ああ、では董卓殿。お元気で」

「はい。北郷さんもお元気で」

歩き出す一刀達。

見送ってくれている董卓達は手を振ってくれている。

「バイバイなのだ〜」

董卓達に元気に手を振り返す鈴々に対し、関羽は先程の一刀と恋のやり取りを見て不機嫌だった。

「全く、一刀殿は隅におけぬな。先日 of 馬超に続き、呂布までも……」

そんな関羽を見て、星が声を掛けて来た。

「ふん！ わ、私には関係のないことだ！」

「お主も素直ではないな、愛紗よ」

「よ、余計なお世話だ！」

星に顔を真つ赤にしながら関羽は言った。

「（星の言う通り、素直になった方が良いのか？）」

そう思いながら、手を振り続けている鈴々を優しい目で見ている――刀をそつと見る関羽。

一刀達は董卓達の見送れ、次の村へと向かったのであった。

第六話 一刀と関羽、化け物を退治せんとするのこゝ（後書き）

どうだったでしょうか？

もし脱字や誤字がありましたら言ってお下さい。

感想やアドバイスをお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8756v/>

北郷一刀～五度目の外史はTV版恋姫！？～

2011年11月4日02時52分発行